

小國史紀事本末

楠時中編纂

上卷

乙 66
518

館藏書目大			
冊	一	二	三
三	一	一	三
冊	號	架	函

新書門

B 3

474



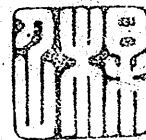
烟

西



史記

永山李輝



小學國史紀事本末

史有三體焉。曰紀傳。曰編年。曰紀事本末。紀傳編年並爲史之正體。其叙事或係人或係年。逐序而述。據實而收。其事雖繁雜。而無有欠漏也。獨至紀事本末。爲史之變體。然而其實難於紀傳編年。夫年月與人事。皆有常者。可據以纂述。惟事之起伏。若紀事本末。據其無常者而立體。故無事則已。苟有事。則一言之微。一事之細。莫不悉舉之。本之於始。而要之於終。溯其源。而窮其流。無挂漏之患者。幾希。予常謂紀傳編年。大人之學也。授兒童者。莫如紀事本末之瞭然也。

伊勢椿君。夙志史學。其所課童蒙。又與予之見同。授教之餘。編此書見示。受而讀之。皆得國史要領。叙事簡而詳。微而顯。其體制亦倣袁氏之紀。務便幼童。是真得我意者。乃請立諸教科之一焉。予既多君之勞。而喜兒童之受賜益大也。安不欣然爲之一言乎。
明治十五年九月上浣

新潟學校長但馬加藤正矩識

緒言

一此書ハ專ラ童蒙ノ爲メニス故ニ紀事務メテ繁褥ヲ去リ以テ記誦ニ便ニス要大勢ヲ示スニ在ルノミ公務ノ餘暇客舎ノ編纂引用書籍ニ乏シキヲ以テ缺漏尚ホ多カラン大方幸ニ訂正セヨ

一一事數處ニ散見スル者ハ其最モ主要ノ處ニ詳記シ他ハ一切略叙ニ從フ又一題目中數事ヲ併セ舉クル者アリ皆其宜キニ從フノミ

一凡ソ事跡ヲ舉クルニ年號ヲ以テスト雖凡讀者尚ホ其前後ニ惑ハンコヲ恐ル故ニ卷首毎ニ列聖ノ

略譜及ヒ霸者ノ世系ヲ載ス庶クハ搜索ニ便セシ
(譜中父子相及フ者ハ其統ヲ記セズ)

椿時中識

列聖略譜

(一) 神武	紀元元年即位 在位七十六年	(二) 綏靖	紀元八十年即位 在位三十三年
(三) 安寧	紀元一百一十三年即位 在位三十八年	(四) 懿德	紀元一百五十四年即位 在位三十四年
(五) 孝昭	紀元一百八十六年即位 在位八十二年	(六) 孝安	紀元二百六十九年即位 在位一百〇九年
(七) 孝靈	紀元三百七十二年即位 在位七十六年	(八) 孝元	紀元四百四十一年即位 在位五十七年
(九) 開化	紀元五百〇四年即位 在位六十年	(十) 崇神	紀元五百六十四年即位 在位六十八年
(十) 垂仁	紀元六百三十二年即位 在位九十九年	(十一) 景行	紀元七百三十一年即位 在位六十年
(十二) 成務	紀元七百九十二年即位 在位六十年	(十二) 仲哀	日本武尊子紀元八百五十二年即位 在位九十九年
(十三) 應神	紀元九百三十九年即位 在位四十四年	(十三) 仁德	紀元九百七十三年即位 在位八十七年
(十四) 履仲	紀元一千〇六十年即位 在位六年	(十四) 反正	履仲ノ弟紀元一千〇六十六年即位 在位六年
(十五) 允恭	反正ノ弟紀元一千〇七十二年即位 在位四十二年	(十五) 安康	紀元一千一百十四年即位 在位三年

(一) 雄略

安康弟紀元一千一百十七年即位
在位二十三年

(二) 清寧

紀元一千一百四十年即位
在位五年

(三) 顯宗

履仲孫紀元一千一百四十五年即位
在位三年

(四) 仁賢

顯宗兄紀元一千一百四十八年即位
在位十一年

(五) 武烈

紀元一千一百五十九年即位
在位八年

(六) 繼體

應神五世孫紀元一千一百六十七年即位
在位二十五年

(七) 安閑

紀元一千一百九十四年即位
在位二年

(八) 宣化

安閑弟紀元一千一百九十六年即位
在位四年

(九) 欽明

宣化兄紀元一千二百零年即位
在位三十二年

(十) 敏達

紀元一千二百三十一
年即位
在位十四年

(十一) 用明

敏達弟紀元一千二百四十六年即位
在位二年

(十二) 崇峻

用明弟紀元一千二百四十八年即位
在位五年

(十三) 推古

崇峻妹紀元一千二百五十五年即位
在位三十六年

(十四) 舒明

敏達孫紀元一千二百八十九年即位
在位十三年

(十五) 皇極

敏達曾孫女紀元一千三百零二年即位
在位四年

(十六) 孝德

皇極弟紀元一千三百零五年即位
在位十年

(十七) 齊明

皇極再孫紀元一千三百十五年即位
在位七年

(十八) 天智

舒明子紀元一千三百六十八年即位
在位四年

(十九) 弘文

紀元一千三百三十二年即位
在位一年

(二十) 天武

天智弟紀元一千三百七十二年即位
在位十四年

(二十一) 持統

天智女紀元一千三百五十八年即位
在位八年

(二十二) 文武

天武孫紀元一千三百五十八年即位
在位十一年

(二十三) 元明

天智女紀元一千三百六十八年即位
在位九年

(二十四) 元正

文武姊紀元一千三百七十五年即位
在位十年

(二十五) 聖武

文武子紀元一千三百八十四年即位
在位六年

(二十六) 孝謙

紀元一千四百零九年即位
在位十年

(二十七) 淳仁

天武孫紀元一千四百十九年即位
在位七年

(二十八) 稱德

孝謙再孫紀元一千四百五十五年即位
在位六年

(二十九) 光仁

天智孫紀元一千四百五十九年即位
在位十二年

(三十) 桓武

紀元一千四百四十二年即位
在位廿五年

(三十一) 平城

紀元一千四百六十六年即位
在位四年

(三十二) 嵯峨

平城弟紀元一千四百七十七年即位
在位十五年

(三十三) 淳和

嵯峨弟紀元一千四百八十四年即位
在位十二年

(三十四) 仁明

嵯峨子紀元一千四百九十四年即位
在位十八年

(三十五) 文德

紀元一千五百一十一年即位
在位九年

(三十六) 清和

紀元一千五百一十九年即位
在位十九年

(三十七) 陽成

紀元一千五百七十七年即位
在位八年

(三十八) 光孝

仁明子紀元一千五百四十五年即位
在位四年

(三十九) 宇多

紀元一千五百四十八年即位
在位十一年

(四十) 醍醐

紀元一千五百五十八年即位
在位三十四年

(四十一) 朱雀

紀元一千五百九十二年即位
在位十七年

(四十二) 村上

朱雀弟紀元一千六百零七年即位
在位六年

(四十三) 冷泉

紀元一千六百廿八年即位
在位三年

(四十四) 圓融

冷泉弟紀元一千六百卅年即位
在位十年

(五) 花山

冷泉皇子紀元一千六百四十五年即位存位三年。寛和

(六) 一條

圓融皇子紀元一千六百五十七年即位存位六年。延承天皇長德天皇長保天皇

(七) 三條

冷泉皇子紀元一千六百七十二年即位存位六年。長和

(八) 後一條

一條皇子紀元一千六百七十七年即位存位九年。寛仁治安万壽長元

(九) 後朱雀

後一條皇子紀元一千六百九十年即位存位十年。長曆長久寛徳

(十) 後冷泉

紀元一千七百〇六年即位存位九年。永承天喜康平治暦

(十一) 後三條

後冷泉皇子紀元一千七百九十九年即位存位五年。延久

(十二) 白河

紀元一千七百六十八年即位存位十五年。承保承暦永保應徳

(十三) 堀河

紀元一千七百四十七年即位存位三年。寛治嘉保承長承徳康和長治嘉承

(十四) 鳥羽

紀元一千七百六十八年即位存位十七年。天仁天永承久元永保安

(十五) 崇徳

紀元一千七百八十四年即位存位九年。天治天承長承保延永治

(十六) 近衛

崇徳皇子紀元一千八百〇二年即位存位十五年。康治天養久安仁平久壽

(十七) 後白河

近衛兄紀元一千八百十六年即位存位四年。保元

(十八) 二條

紀元一千八百十九年即位存位八年。平治水醫應保長寛永萬

(十九) 六條

紀元一千八百廿五年即位存位四年。仁安

(二十) 高倉

後白河皇子紀元一千八百三十八年即位存位十三年。嘉應順安安元治承

(二十一) 安德

紀元一千八百四十年即位存位六年。養和壽永

(二十二) 後鳥羽

安德皇子紀元一千八百四十四年即位存位十五年。元暦文治建久

小學國史紀事本末卷上

伊勢椿 時中輯

皇孫基ヲ創ム

我カ大日本國太古ハ大八洲國又豐葦原中國ト
號シ、天祖天照大神ノ弟素盞雄尊ノ領スヘキ地
ナリシカト父皇伊弉諾尊ノ旨ニ忤フアリシ
ヲ以テ之ヲ受ルヲ能ハス、其遠孫大國主命姑ク
之ヲ主宰セリ、然レモ時運未タ開ケス、土人紛爭

シテ靜マラス天祖之ヲ恤ミ、皇孫瓊々杵尊ヲ降
シテ統御セシメント欲シ、武甕槌命等ヲ遣ハシ大
國主命ヲ諭サシム、大國主命謹ミテ命ヲ奉ス、是
ニ於テ勅シテ曰、葦原中國ハ吾カ子孫ノ世々君
タルヘキ所ナリ、寶祚ノ隆エムヲハ、天地ト與ニ無
窮ナルヘシト、三種ノ神器則チ鏡劍璽ヲ賜ヒ以テ
帝王ノ璽トナサシム、皇孫命ヲ受ケ此土ニ降ル、猿
田彦命奉迎シテ皇居ヲ日向ニ定ム、後四世ヲ經
テ神倭磐余彦尊ニ至リ、遂ニ中國ヲ征定シ都ヲ大
和ニ奠ム、後世稱シテ人皇ノ始祖トシ、神武天皇ト謚ス、

天祖ノ命ニ隨ヒ三種神器ヲ内殿ニ奉ズ、崇神帝
ニ至リ、漸ク其褻瀆ヲ畏レ、別ニ其形ヲ模造シ以
テ大内ニ留メ、其眞ノ鏡劍ハ遷シテ大和ノ笠縫
ニ祀リ、後又伊勢ニ遷ス、今ノ神宮是ナリ、日本武
尊東征ノ時其劍ヲ請ヒテ行キ、遂ニ尾張ニ祀ル、今
ノ熱田ノ神宮是ナリ

神武ノ東征

帝ハ鸕鷀草葺不合尊ノ第四子ナリ、生レナガラ
ニシテ明達意豁如タリ、時ニ西州已ニ服シテ、東
方ハ未ダ平ガス、長髓彦ト云ヘル者、饒速日命ヲ

奉シテ主トナシ大和ニ居リ、其他群豪諸所ニ割據シ、互ニ相并吞セリ、帝慨然トシテ掃蕩ノ志ヲ起シ、宗室群臣ニ謂ヒテ曰、我が先皇命ヲ受ケテ此國ニ主タリ、然ルニ國民尚ホ未ダ王化ニ沾ハズ、吾レ之ヲ憫ム、聞ク大和ノ國ハ全國ノ中央ニシテ、山岳四周シ都トナスニ宜シト吾レ將ニ東方ヲ平定シ、都ヲ大和ニ定メ遂ニ四方ヲ經營セント欲スト是ニ於テ紀元前七年庚寅ノ歲親ヲ兵ヲ率ヰテ日向ヲ發シ、筑紫安藝ヲ經テ吉備ヨリ海ヲ航シテ浪速ニ赴キ、河内ヨリ大和ニ入ラムトス、長髓彦

逆ヘ拒ク、官軍利アラズ、皇兄五瀬尊傷キテ薨ズ、乃チ路ヲ轉シテ紀伊ヨリ入り、道臣命ヲ先鋒トシ、先ツ沿道ノ諸豪族兄猾兄磯城及ビ八十梟帥等ヲ誅シ、進テ大和ニ入ラントス、饒速日命、長髓彦ヲ殺シ來リ降ル、乃チ兵ヲ分テ諸不庭ノ徒ヲ誅シ、悉ク大和ヲ定メ、紀元元年春正月、橿原ニ都シ天皇ノ位ニ即ク、是ニ於テ饒速日命ノ子可美真手命ニ内衛ヲ掌シメ、道臣命ニ外衛ヲ掌シメ、天種子命及天富命ニ祭政ヲ司シメ、諸功臣ニ地ヲ賜ヒ國造縣主ト爲セリ

崇神成務ノ經綸

中州既ニ平定セシカ、其他ハ尚ホ全ク服從セス、
崇神帝大ニ祖業ヲ擴張スルノ志アリ、大彥命等四
人ニ命シテ將軍トナシ、出テ教化ヲ敷カシム、皆
兵ヲ率、并印ヲ佩ハシメ、命ヲ聽サル者アレハ之
ヲ征討スルヲ許ス、是ニ於テ皇威漸ク四遠ニ暢
ヒ、海外ノ諸蕃多ク來リ服ス、初メ帝即位ノ後數
年、饑疫比リニ至リ、盜賊亦起レリ、帝神ヲ敬シ政
ヲ務メ、精ヲ勵シ治ヲ圖ル、是ニ至テ年穀大ニ稔シ民
其業ヲ樂ム、稱シテ御肇國天皇ト云フ、乃チ始テ戸口

ヲ檢シ調役ヲ課シ、又池溝ヲ開キ船舶ヲ造リ、以
テ民ニ便ス、垂仁帝、前業ニ遵ヒ益々民產ヲ殖シ、景
行帝、西熊襲ヲ征シ、東蝦夷ヲ平ケ、海内平治ス、成
務帝相繼テ内政ヲ張リ、三年始テ大臣ヲ置キ、五年
又山河ヲ界シ國縣ヲ分畫シ、造長稻置ノ吏ヲ置
ク、是ニ於テ百姓居ニ安シ、天下大ニ治マレリ

狹穗彥ノ叛

垂仁帝ノ后ノ兄狹穗彥、寵ニ狃レテ非望ヲ懷キ、嘗テ
后ニ匕首ヲ授ケ、間ニ乘シテ弑逆ヲ行ハシム、帝
一日后ノ宮ニ來リ寢ス、后兄ノ言ヲ思ヒ、淚隨テ帝

ノ面ニ濺ク、帝驚キ寤テ曰、朕今錦蛇頸ヲ繞リ、大
雨狹穗ヨリ來テ面ヲ濡スト夢ムト、后懼レ遂ニ
實ヲ告ク、帝曰、是レ汝ノ罪ニ非スト、乃チ八綱田
ニ命シ之ヲ討シム、狹穗彦稻ヲ積テ城トナシ、固
ク拒テ下ラス、后歎シテ曰、是レ何ソ吾カ手ツカ
ラ兄ヲ殺スニ異ナラント、竊ニ皇子ヲ抱キ、奔テ
城中ニ投ス、帝狹穗彦ニ勅シテ后母子ヲ奉還セ
シム、從ハス、八綱田火ヲ放テ之ヲ攻ム、城陷ル、后
人ヲシテ皇子ヲ出サシメ、兄ト共ニ焚死ス、

景行ノ經略

景行帝ノ十二年、筑紫ノ熊襲叛ス、帝親カラ之ヲ征ス、
賊帥二女アリ、其長女欸ヲ納レ、誘テ父ヲ殺ス、帝
乃チ其女ヲ誅シ、筑紫悉ク平ク、二十七年復タ叛
ス、皇子小碓尊ニ命シ之ヲ討シム、皇子年十六、女
裝シテ賊營ニ入り、賊帥ノ醉卧セルヲ伺ヒ、劍ヲ
拔テ之ヲ刺ス、賊帥驚テ名ヲ問ヒ、且ツ曰、吾未タ
剛勇ナルヲ皇子ノ如キ者ニ見ス、請ヲ號ヲ上テ
日本武ト云ハント、乃チ死ス、餘衆讐服シ、西州遂
ニ平ク、四十年東夷叛ス、復タ皇子ヲシテ之ヲ征セ
シム、駿河ノ賊皇子ヲ誘テ遊獵セシメ、火ヲ放テ

野ヲ燒キ、之ヲ殺サントス、皇子劍ヲ拔キ草ヲ薙
テ免ル、ヲ得、遂ニ賊ヲ擊テ之ヲ殲シ、相模ヨリ
航シテ上総ニ至リ、又陸奥ニ入ル、賊皆迎服シ蝦
夷悉ク平ク、乃チ東山道ヲ經テ伊勢ニ入リ、京師
ニ歸ラント欲ス、途ニシテ疾テ薨ス、帝又武内ヲ
遣ハシ、蝦夷ヲ巡察セシム、武内日高國ニ至テ歸レ
リ、是ニ於テ東夷皆服セリ、熊襲ハ今ノ薩摩大隅
ノ邊ニ在リ、東夷トハ今ノ關東及ヒ東北ノ諸國
ヲ謂フナリ

神功三韓ヲ征ス

仲哀帝九年、熊襲復タ叛ス、帝親カラ征シテ筑紫
ニ至ル、神アリ皇后ニ憑リ託シテ曰、先ツ新羅ヲ征セハ熊
襲自ラ服セント、帝從ハス、一日暴ニ崩ス、后秘シ
テ喪ヲ發セス、大臣武内等ト謀リ、策ヲ決シテ新
羅ヲ征ス、后親カラ男裝ヲナシ、師ヲ率テ發ス、新羅
大軍ノ奄チ至ルヲ意ハス、國王大ニ畏レ、面縛シ
テ出降ル、后乃チ質子ヲ納レシメ、盟約ヲ申ネ、每
年八十船ノ貢物ヲ徵ス、高麗百濟皆風ヲ望テ來
降ス、乃チ官司ヲ置キ、振旅シテ還ル、是ニ於テ三
韓我が屬國トナル、三韓ハ今ノ朝鮮ナリ、初メ后

小澤國史記卷之八
一
娠メリ、還ルニ及テ乃チ皇子ヲ生ム、是ヲ應神帝
トナス、是ニ於テ喪ヲ發シ京ニ入ル、庶王麿坂忍
熊ノ二人、反シテ后ヲ途ニ要ス、后武内等ニ命ジ
伐テ之ヲ定メ、朝ニ臨ミ政ヲ攝スルヲ六十年ニ
シテ崩ス、神功皇后ト謚ス、應神帝ノ子、百濟王ノ
子阿直伎來朝ス、阿直伎經典ニ通ゼルヲ以テ、帝
皇子稚郎子ヲシテ就テ學ハシム、阿直伎其國人
王仁ヲ薦ム、帝命シテ之ヲ徵ス、王仁論語及ド千
字文ヲ齎シ又タ冶工服工釀酒工等ヲ率テ來レ
リ、帝又使ヲ吳國ニ遣シ、縫工織工ヲ求ム、是後百
濟數、五經、天文、醫藥、曆數、博斗ヲ貢ス、我國之文
教工藝此時ニ起レリ、

仁德ノ勤儉

應神帝少子稚郎子ヲ立テ、太子トス、帝崩シテ
後、太子兄ノ大鷦鷯皇子ニ讓ル、皇子受ケズ、互ニ
相推讓スルヲ三年、太子終ニ自殺ス、大鷦鷯乃チ
位ニ即ク、是ヲ仁德帝トス、帝仁恕ニシテ物ヲ愛
ス、嘗テ高樓ニ登リ、人烟ノ稀少ナルヲ觀、乃チ民ノ
貧ナルヲ知リ、悉ク租稅ヲ免シ、痛ク自カヲ節儉
ス、宮中雨露ヲ免レズ、后之ヲ患フ、帝曰、君ハ民ヲ

以テ本トス、民ノ富ハ即チ朕ノ富ナリト、是ニ於
テ民皆富ミ、數^タ民カヲ以テ宮殿ヲ造營センコトヲ
請ヒテ止マス、帝許サス、久シテ後始テ其請ニ從
フ、乃チ難波堀江ヲ鑿リ、茨^ハ田^タノ隄ヲ築キ、以テ水
患ヲ除ク、此時上下大ニ治リ、二十餘年ノ間、天下
刑措ノ風アリ

眉輪ノ變

安康帝、弟大泊瀨皇子ノ爲ニ、宗室大草香ノ妹ヲ
聘セント欲シ、根^ネ使主^メヲシテ其意ヲ通ゼシム、大
草香大ニ喜ビ、珠蔓ヲ獻シテ信トス、使主珠蔓ヲ

私シ、詐リ奏シテ曰、大草香命ヲ聽カズ、且ツ陛下
ヲ侮レリト、帝大ニ怒リ、兵ヲ遣ハシテ大草香ヲ
殺シ、其妹ヲ以テ大泊瀨ニ配シ、又其妃ヲ取テ后
トス、大草香ノ子眉輪年幼ナリ、后ニ從テ宮中ニ
養ハル、帝嘗テ后ニ謂テ曰、朕汝ヲ愛ス、但眉輪ニ
介心スルノミト、眉輪竊ニ之ヲ聞キ、帝ノ醉卧ヲ
伺ヒ、刺シテ之ヲ弑ス、大泊瀨變ヲ聞キ馳セ至リ、
諸王ノ爲ス所ト疑ヒ、誅殺スル所多シ、黑彦皇子
禍ヲ懼レ、眉輪ト共ニ大臣葛城圓ノ家ニ匿ル、大
泊瀨其家ヲ圍ミ、攻テ之ヲ誅シ、然後位ニ即ク、之

ヲ雄略帝トス、乃其妃ヲ立テ、后トス、一日大ニ群臣ヲ會ス、使主珠蔓ヲ着テ朝ス、后之ヲ見テ泣ク、帝怪ミ問テ其實ヲ知リ、乃チ使主ヲ誅ス、帝剛健ニシテ殺ヲ好ム、嘗テ田獵ニ因テ舍人ヲ斬ントス、后之ヲ諫ム、帝卽大ニ悟ル、晚年益白艾シ、意ヲ政事ニ用ユ、是ニ由テ天下無事ナリ、

顯宗仁賢ノ克讓

雄略帝、押磐皇子ヲ忌ミ、之ヲ誘殺ス、皇子二子アリ、億計弘計ト云フ、皇子ノ遺臣奉シテ播磨ニ走ル、後其人死シ、三皇孫降テ民間ニアリ、清寧帝ノ

弟ニ至リ、或之ヲ言ス、帝喜テ曰、朕常ニ子ナキヲ憂フ、今遽ニ二子ヲ得ルハ幸ナリト、乃チ迎ヘテ宮ニ入レ、億計ヲ立テ、太子トス、帝崩ス、太子弘計ニ讓ル、可カス、其姨飯豐青皇女假リニ政ヲ攝シ、又幾ハクモナクシテ薨ス、弘計乃チ位ニ卽ク、之ヲ顯宗帝トス、亦億計ヲ以テ太子トス、帝雄畧帝カ嘗テ其父ヲ殺セシヲ怨ミ、其陵ヲ毀タシト欲ス、億計諫テ曰、先帝ノ殊恩忘ルヘカラス、令其父ノ陵ヲ毀ツハ不可ナリト、乃チ止ム、帝崩シテ億計立ツ、之ヲ仁賢帝トス、二帝久ク閭閻ニ在リ、

其疾苦ヲ知ル、又聰敏ニシテ仁惠アリ、故ニ二帝ノ世、仁政尤多ク、百姓殷富ナリ、

百濟佛ヲ獻ス

欽明帝ノ十三年、百濟入貢、佛像及ヒ經典ヲ獻ズ、帝之ヲ群臣ニ問フ、大臣蘇我、稻目受テ之ヲ禮セント請フ、大連物部尾輿及ヒ中臣鎌子曰、我邦素ヨリ神祇アリ、今蕃國ノ神ヲ奉セハ、恐ハ我神怒ヲ速カント、帝之ヲ稻目ニ賜フ、稻目宅ヲ捨テ寺トナス、會疫癘流行ス、尾輿等以テ神譴トシ、奏シテ寺ヲ燒キ、佛像ヲ江中ニ投ス、其後百濟新羅相繼テ佛像ヲ獻ス、敏達帝ノ弟、稻目ノ子馬子深ク之ヲ信ス、疫癘復タ行ハル、尾輿ノ子守屋、鎌子ノ子勝海、之ヲ禁セント請フ、馬子哀求シテ己マズ、帝曰、汝獨リ之ヲ爲セ、他人ヲ惑ハス勿レト、是時皇子厩戸モ亦之ヲ信シ、遂ニ馬子ニ黨ス、帝疾アリ、二人始テ請テ僧ヲ禁内ニ延キ、之ヲ禱ラシム、守屋既ニ亡テ後、二人憚ル所ナク、崇奉益甚タシ、推古帝ノ弟、僧徒漸ク横恣ナルヲ以テ、其三十三年、始テ僧正僧都ヲ置キ、之ヲ督セシム、此時佛法入テヨリ凡七十五年、海内ノ寺已ニ四十六、僧尼一

千三百八十五人アリト云フ、其後九十餘年、聖武帝ノ天平九年ニ至リ、國毎ニ勅シテ國令減罪ノ二寺ヲ建シメ、又帝后王公以下自カラ寺ヲ建テ、冥福ヲ祈ル、佛寺ノ盛ナル此ヲ極トス、

蘇我氏ノ僭逆

守屋馬子及ヒ厩戸ト怨隙日ニ深シ、厩戸先ツ人ヲシテ勝海ヲ殺サシム、用明帝崩ス、守屋穴穗部皇子ヲ立テント欲ス、馬子后ノ命ヲ以テ皇子ヲ殺シ、遂ニ厩戸ト共ニ守屋ヲ攻ム、守屋戰敗レテ死ス、是ニ於テ崇峻帝ヲ立ツ、帝ハ蘇我氏ノ出ナ

リ、而シテ馬子ノ專横ヲ惡ム、嘗テ猪ヲ獻スル者アリ、帝指テ曰、孰カ能ク朕カ疾ム所ノ者ヲ斬ル、此猪ノ如クセムト、馬子聞テ之ヲ惡ム、陰ニ人ヲシテ帝ヲ弑セシム、厩戸素ヨリ其情ヲ知ル、而禁スルヲ能ハス、哭シテ曰、是レ帝カ過去ノ報ナリト、馬子推古帝ヲ立ツ、亦其出ナリ、厩戸ヲ以テ太子トナシ、萬機ヲ攝行セシム、厩戸請テ始テ官位ヲ定メ、憲法ヲ制シ、又馬子等ト國史ヲ撰ス、既ニシテ二人相繼テ薨ス、馬子ノ子蝦夷、大臣トナリ、驕横父ニ過ク、子ハ鹿更ニ甚タ父子第宅出入

小學國史外紀卷之八 上卷
乘輿ニ僭擬シ、諸孫ヲ稱シテ王子ト曰フニ至ル、
皇極帝ノ弟、八鹿父ニ代テ大臣タリ、其出古人大
兄皇子ヲ立ント欲シ、厩戸ノ子山背王ノ威名アルヲ忌ミ之ヲ殺ス、一家皆難ニ殉ス、是時厩戸ノ子孫皆盡キタリ、

中大兄、我氏ヲ誅ス

蝦夷父子悖逆日ニ甚シ、中臣鎌足博學ニシテ智略アリ、官ヲ辭シテ拜セス、慨然匡濟ノ志アリ、陰ニ心ヲ舒明帝ノ皇子中大兄ニ屬ス、一日共ニ鞠ヲ法興寺ニ蹴ル、因テ親暱スルヲ得テ、密ニ其情

ヲ告ク、皇子大ニ喜ブ、鎌足又我氏ノ族石川麿及ヒ佐伯子麿等ヲ薦テ援トナス、時ニ韓使來貢ス、鎌足等其際ニ乘シ事ヲ舉ント欲ス、皇極帝ノ四年六月、天子殿ニ御シ貢ヲ受ク、入鹿側ニ侍セリ、皇子鎌足ト兵器ヲ執ニ戸側ニ隱レ、且ツ事ニ托シテ諸門ヲ閉チ、衛兵ヲ散ス、初メ石川麿表文ヲ讀ミ、子麿等貢物ヲ進メ、因テ劍ヲ執テ擊刺セシヲ約ス、期ニ至リ子麿等畏縮シテ發セズ、石川麿表ヲ讀ミ、將ニ盡ントシテ聲戰フ、入鹿怪テ故ヲ問フ、子麿詭リ答テ曰、天威咫尺ナルニ因ルト、皇子

機ヲ失ハシコヲ恐レ、直ニ入テ入鹿ヲ斫ル、衆乃チ進ミ、遂ニ之ヲ殪ス、帝大ニ驚ク、皇子奏シテ曰、臣等謹テ國ノ爲ニ賊臣ヲ誅スト、乃チ兵ヲ遣ハシテ蝦夷ヲ誅セシム、蝦夷家ヲ焚キ自殺ス、

天智ノ中興

蘇我氏既ニ誅ニ伏ス、皇極帝位ヲ中大兄ニ授ケント欲ス、中大兄固辭ス、乃チ孝德帝ヲ立テ中大兄ヲ太子トシ、政ヲ輔ケシム、孝德素ヨリ意ヲ政事ニ用フ、太子乃チ奏シテ大ニ庶政ヲ革ム、始テ年號ヲ建テ大化ト云フ、其二年詔シテ新制ヲ行

フ、是ヨリ先キ皇族大臣及權貴ノ家皆私有ノ土アリ、互ニ相兼并シ民害ヲナセリ、是ニ於テ一ニ之ヲ罷メ、皆封祿ヲ賜ヒ國司郡司ヲ置テ民政ヲ掌トラシメ、又租庸調及班田收授ノ法ヲ定メ、京師ニハ八省ヲ置キ、考課黜陟ノ法ヲ立テ、鍾賈ヲ朝ニ設ケ、以テ言路ヲ通シ、冤枉ヲ理ス、國家ノ制度始テ定マル、孝德崩シ皇極再祚ス、是ヲ齊明帝トス、崩ニ及ヒ太子位ニ即ク、是ヲ天智帝トス、帝學ヲ好ミ政ヲ務メ、始テ令ヲ撰シ諸制度ヲ定メ、朝儀ヲ起シ學校ヲ建テ、文物大ニ備ハル、蘇我

氏僭亂ノ後ヲ承ケ、能ク弊ヲ除キ制ヲ定ム、故ニ
後世帝ヲ以テ中宗トナセリ。

壬申ノ變

天智帝崩ニ臨ミ、皇子大友ノ幼ナルヲ以テ、位ヲ
皇弟大海人ニ傳ヘント欲ス、大海人固辭シ、僧ト
ナリテ吉野ニ入ル、大海人英武ニシテ威望アリ、
時人云フ、是虎ヲ野ニ放ツカ如シト、是ニ於テ太
子大友立ツ、是ヲ弘文帝トス、朴井雄君大海人ニ
告テ曰、朝廷山陵ヲ築クニ托シ、兵ヲ近國ニ召シ、
又菟道ノ橋ヲ遮テ、吉野ノ糧ヲ運ブ者ヲ留メ、又

多ク庫候ヲ置ク、其勢我ニ迫ルニ似タリト、壬申
年六月、大海人遂ニ兵ヲ舉テ美濃ニ赴ク、京師
大ニ震フ、或急ニ兵ヲ發シテ之ヲ討タント請フ、
帝聽カズ、吉野ノ將大伴吹負等兵ヲ率テ入テ犯
ス、將軍壹岐韓國大野果安等官軍ニ將トシテ之
ヲ拒キ、互ニ勝負アリ、吹負及ヒ村國男依等道ヲ
分テ進ミ、勢多ニ至ル、帝親カラ之ヲ拒ク、官軍大
ニ敗レ、諸大臣皆逃ル、獨物部麿從ヘリ、七月帝山
前ニ崩ス、帝學ヲ好ミ、詩文ヲ善クス、然レモ仁柔
不斷終ニ禍ニ遇ヘリ、大海人京ニ入リ、先帝ノ親

臣數人ヲ斬リ、其餘ハ悉ク措テ問ハズ、乃チ位ニ
卽ク、之ヲ天武帝トス、是ニ於テ天智ノ統姑ク絶
ツ、光仁帝ニ至テ復タ舊ニ復セリ、

聖武ノ惑溺

聖武帝ハ文武帝ノ子ナリ、文武帝崩シテ帝幼ナ
リ、帝ノ母元明及ヒ姊元正ノ二帝相繼テ位ニ卽
キ、以テ帝ニ傳フ、文武帝心ヲ政事ニ用ヒ、嘗テ藤
原不比等ニ命シテ律令ヲ撰定セシム、典章制度
大ニ完シ、元明元正皆文武ノ政績ヲ守リ、務テ農
工ヲ勸メ、數節孝ヲ隆ス、古事記日本書紀風土記

等ノ書皆此際ニ成ル、文教隆盛天下安樂ナリ、之
ヲ大寶ノ治ト謂フ、帝之ヲ承ケ即位ノ初メ、頗ル
政ヲ勤メ、悲田院施藥院等ヲ設ケ、惠政頗ル多シ、
後漸ク弛解シ、又篤ク佛法ヲ信ジ、佛像ヲ造リ、寺
ヲ建ルヲ夥シ、自カラ三寶ノ奴ト稱スルニ至ル、又
僧元昉等ヲ寵シ、元昉常ニ宮中ニ出入シ、頗ル醜聲
アリ、藤原廣嗣奏シテ之ヲ劾ス、帝信セス、而廣嗣
ヲ遠サク、玄昉又廣嗣ノ家ヲ私セントス、廣嗣大
ニ怒リ、兵ヲ筑紫ニ聚ム、朝議以テ謀叛トナシ之
ヲ討ツ、廣嗣曰、臣敢テ叛スルニ非ズ、姦臣ヲ誅セ

ント欲スル耳ト、終ニ誅セラル、後群臣多ク玄昉ノ姦ヲ奏ス、帝已ムコヲ得ズ之ヲ貶ス、帝佛ニ惑フヲ以テ殺生ヲ禁シ、大罪ト雖死刑ヲ施サズ、是ヨリ後、政姑息多ク、人復タ法ヲ畏レズ、

押勝道鏡ノ亂

孝謙帝ハ聖武帝ノ女ナリ、初メ藤原仲滿ヲ寵ス、仲滿帝ニ勸メテ太子道祖王ヲ廢シ、其女壻大炊王ヲ立ツ、帝遂ニ位ヲ傳フ、之ヲ淳仁帝トス、仲滿姓名ヲ惠美押勝ト賜ヒ、政ヲ執ル日專ナリ、橘奈良膺藤原良繼等之ヲ除カント謀リ、皆敗ル、是ニ

至リ、孝謙上皇又僧道鏡ヲ寵ス、押勝已カ寵ヲ奪ハレンコヲ懼レ、兵ヲ發シテ道鏡ヲ殺シ、遂ニ上皇ヲ幽セント謀リ、事露ハレテ誅セラル、道鏡益横ナリ、上皇淳仁ヲ廢シテ再祚ス、是ヲ稱徳帝トス、道鏡ヲ拜シテ法王トナス、道鏡遂ニ位ヲ禪ラレンコヲ謀リ、和氣清麿ニ命シ、宇佐ニ詣リ、神旨ヲ受ケシム、發スルニ臨ミ、道鏡竊ニ謂テ曰、吾果シテ帝位ニ即クヲ得バ、厚ク汝ヲ賞セント、清麿從ハズ、反命シテ曰、神告ク、天位必ズ皇統ヲ立ヨ、無道ノ人ハ、早ク之ヲ除クベシト、道鏡大ニ怒リ、

清曆ヲ大隅ニ流ス、道鏡後チ異味ヲ進ム、帝此ニ由テ崩ズ、光仁帝ノ弟、道鏡ヲ下野ニ流シ、清曆ヲ召還ス、清曆ハ備前ノ人、人トナリ抗直ニシテ氣節アリ、後民部卿ニ至ル、今其靈ヲ祀リ、號ヲ賜テ護王神社ト曰フ、

百川二朝ニ定策ス

稱徳帝崩シ、皇嗣未タ定マラズ、道鏡竊ニ篡奪ヲ圖ル、藤原百川光仁帝ヲ立ント欲ス、吉備眞備等肯セス、百川遂ニ藤原永手等ト策ヲ決シ之ヲ立ツ、初メ押勝政ヲ擅ヒシ、皇族多ク禍ニ嬰ル、帝酒

ヲ縱ニシ自カラ晦マス、是ニ由テ免ル、ヲ得タリ、是ニ於テ大ニ弊政ヲ改メ、佞幸ヲ黜ケ、鯁直ヲ舉ケ、百川ニ委任シテ機務ヲ執ラシメ、閑官ヲ省キ冗兵ヲ汰シ、朝野肅然、中興ノ風アリ、而ルニ皇后井上、内親王、淫縱ニシテ太子他戸亦驕逸ナリ、百川意ヲ山部皇子ニ屬ス、會后罪アリ、帝命シテ之ヲ幽セシム、百川乃チ百官ヲ召シ、詔ヲ矯テ曰、詔アリ、皇后太子ヲ廢スト、帝驚テ曰、何ソ此ニ至ラン、百川因テ后母子ノ無狀ナルヲ奏ス、帝終ニ之ニ從フ、後立ル所ヲ擇フ、百川山部ヲ立テント

請フ帝許サス百川殿前ニ立テ退カサル一數日帝其忠誠ニ感シ乃チ之ヲ許ス山部立ツ是ヲ桓武帝トス

桓武夷ヲ平ケ都ヲ遷ス

蝦夷景行帝以來叛服常ナシ齊明帝ノ代阿部比良夫ヲシテ之ヲ討シム比良夫舟師ヲ率テ之ニ臨ム蝦夷乃チ降ル比良夫郡領ヲ淳代津輕ニ置キ以テ其地ヲ定メ遂ニ肅慎ヲ伐チ虜獲甚多シ是ヨリ蝦夷朝貢絶エズ來レハ則宴ヲ賜ヒ位ヲ授ケ厚ク之ヲ遇ス而レモ時ニ叛亂アリ聖武帝ノ代陸奥ニ鎮守府ヲ置キ多賀城ヲ築キ之ヲ守ル

光仁帝ノ代陸奥ノ人伊治等亂ヲ蝦夷ニ作シ東北大ニ亂ル征討使ヲ發シ之ヲ討ム帝ノ時ニ及テ尚ホ未タ平カス賊勢益盛ナリ乃チ阪上田村麿ヲ征夷大將軍トシ諸國ニ勅シテ兵ヲ發シ糧ヲ運シメ以テ之ヲ援ク田村進テ賊ヲ破リ城ヲ膽澤ニ築キ兵ヲ募テ之ヲ守ル是ニ於テ夷酋皆降リ蝦夷始テ定ル神武帝以來皇居時ニ隨ヒ遷移常ナク後代ニ至リ或ハ近江ニアリ或ハ奈良ニ在リ聖武帝ノ時恭仁難波信樂等ニ歷遷ス而未タ定都アラズ帝ニ至テ又平城ヨリ長岡ニ遷ル既ニ

シテ其狹隘ニシテ經費却テ大ナルヲ以テ、延暦十三年、再ヒ山城ノ乙訓ニ遷リ、平安城ト號ス、今ノ京都是ナリ、帝性英武、外ハ夷狄ヲ攘ヒ、内ハ土木ヲ起ス、故ヲ以テ國用殆ト盡ク、然レ氏心ヲ政治ニ用ヒ、用ヲ節シ、費ヲ省キ、以テ竟ニ大業ヲ成シ、後世其力ニ賴レリ、

藥子ノ亂

平城帝太子タリシハ、宮女藤原藥子ニ通ズ、桓武帝怒テ藥子ヲ逐フ、平城帝立ツニ及ビ、復タ之ヲ召シ、嬖寵甚厚シ、又游幸ヲ好ミ、爲ニ政事ヲ廢ス

ルニ至ル、藥子ノ兄仲成、事ヲ用ヒ、權ヲ專ニス、帝位ヲ嵯峨帝ニ讓ル、藥子仲成ト謀リ、平城上皇ニ勸メ、再ヒ位ニ即キ、都ヲ奈良ニ復サシメ、以テ后位ニ備ハラント冀フ、上皇之ニ從ス、乃チ阪上田村麿ヲ召シ、還都ヲ議ス、帝大ニ怒リ、仲成ヲ收ヘ、藥子ノ罪ヲ暴ス、弘仁元年九月、上皇遂ニ藥子ト共ニ東國ニ走ラントス、帝使ヲ遣シ、桓武帝ノ陵ニ告ケ、田村麿ニ命シ、上皇ヲ追ハシム、上皇衆潰、宮ニ還テ薙髮ス、藥子窮迫シ、藥ヲ仰テ自殺ス、嵯峨帝上皇ヲ奉スル故ノ如ク、變故ノ爲ニ其歡ヲ

失ハズ、

三韓ノ叛服

崇神帝ノ^ク任^ナ那國來朝ス、是^レ外國入朝ノ始ナ
リ、垂仁帝ノ^ク新羅王ノ子^ア天^ヒ日^ヒ槍歸化ス、神功西
征ノ後、三韓内屬朝貢絶エザル^一二百餘年、間内
亂アレハ之ヲ救ヒ、或ハ其王族ヲ擇ヒ、命シテ王
トナシ、又無禮アレハ之ヲ討チ、貢ヲ缺ケハ之ヲ
責ム、而新羅尤不恭ニシテ、百濟常ニ謹順ナリ、當
時又日本府ヲ任那ニ置キ、兵ヲ置テ之ヲ戍ラシ
ム、允恭帝ノ^ク任那國司^キ吉^キ備^キ田^キ狹^キ顯宗帝ノ^ク紀

大磐並ニ任那^ニ據テ叛セリ、後皆敗レテ誅セラ
ル、雄略帝ノ^ク高麗、百濟ヲ亡ス、帝百濟ノ質子末
多ニ命シテ王トナシ、兵ヲ以テ之ヲ送リ、其國ヲ
復セシム、欽明帝ノ^ク新羅、任那ヲ奪フ、帝兵ヲ遣
ハシ百濟ニ命シ、共ニ新羅ヲ伐シム、決セザル^一
數十年、推古帝ノ時、新羅終ニ罪ニ伏シ、任那ト和
ス、齊明帝ノ^ク唐又百濟ヲ滅ス、七年、帝親カラ朝
倉宮ニ幸シ、諸軍ヲ督シテ之ヲ救フ、會崩ス、天智
帝遺詔ヲ奉シ、益兵ヲ發シテ救援シ、又百濟ノ質
子^カ豐ニ命シテ王トナシ、歸テ恢復ヲ圖ラシム、豐

敗レ百濟全ク亡ブ、是ニ於テ王師始テ歸ル、高麗
モ亦尋テ亡ブ、元明帝ノ_キ、高麗歸化ノ民ヲ武藏
ニ移シ聖武帝ノ_キ、又新羅ノ人ヲ武藏ニ置ク、今
ノ高麗郡新羅郡是ナリ、仁明帝承和九年、新羅ノ
朝貢舊制ニ遵ハサルヲ以テ、詔シテ之ヲ停ム、神
功ノ征韓ヨリ、凡六百四十餘年ナリ、又聖武帝ノ
_キ、渤海始テ朝貢ス、帝引田虫曆ヲシテ之ヲ送ラ
シム、是ヨリ朝貢相繼ク、而其禮至テ恭謹ナリ、其
使者斐類父子ノ如キハ詩オヲ以テ特ニ優寵セ
ラル、其後契丹攻テ其國ヲ降シ、東丹ト改號ス、醍

醐帝延長八年、渤海ノ故臣斐瑒自カラ東丹國使
ト稱シ來朝ス、廷議其失節ヲ責メ之ヲ却ク、是ヨ
リ復來ラズ、

學生唐ニ入ル

我邦ノ漢土ニ通スルハ、蓋神功后ノ時ヲ始トス、
其後我西邊ノ姦民佯テ倭王ト稱シ、往テ彼ノ封
爵ヲ受ケ其贈遺ヲ貪リシヲアリ、推古帝ノ_キ、始
テ小野妹子ヲ隋ニ遣ハシ、其後往來漸ク繁ク、鴻
臚館及ヒ遣唐使ヲ置ケリ、天智帝以來、政律典禮
皆唐制ニ模仿シ、又士民ヲシテ入唐留學セシム、

業ヲ成ス者多シ、文武帝ノ_キ僧道昭始テ禪學ヲ傳ヘ、聖武帝ノ_キ安部仲磨遂ニ彼ニ仕テ左補闕ニ至ル、其後_キ備真備僧玄昉ト共ニ唐ニ入り、真備歸テ右大臣ニ拜ス、桓武帝ノ_キ僧最澄比叡山ヲ創メ、嵯峨帝ノ_キ僧空海高野山ヲ開ク、皆唐ニ入り教ヲ傳ヘシ者ナリ、其他才藝ヲ以テ名ヲ彼地ニ播メシ者亦多シ、宇多帝ノ_キニ至リ、菅原道真奏シテ遣唐使及ヒ留學生ヲ罷ム、蓋近時唐國凋弊シ、文華稍衰ヘ、且ツ海路險惡ニシテ、往々覆没ノ患アルヲ以テナリ、而レ_レ僧徒ノ往來ハ

ル者後世ニ至ルマデ絶エズ、嵯峨帝ノ廢太子高_カ岳親王モ亦僧トナリ唐ニ入り、遂ニ西域ニ赴テ薨スト云フ

承和ノ變

嵯峨帝弘仁ノ事アリシヲ以テ、敢テ其子ヲ立テズ、其弟淳和帝ヲ立ツ、淳和モ亦其子恒貞親王ヲ立テズ、而シテ嵯峨ノ子仁明帝ヲ立ツ、仁明帝嵯峨上皇ノ旨ヲ承ケ、亦其子道康親王ヲ舍テ、恒貞親王ヲ太子トス、淳和上皇辭スレ_レ聽カズ、恒貞學ヲ好ミ才名アリ、常ニ自カラ其位ヲ危疑シ、屢

哀請シテ退カムヲ求ム、亦許サズ、而道康ノ母
家藤原氏勢方ニ盛ナリ、東宮ノ僚屬伴健岑橘逸
勢等竊ニ之ヲ憂フ、承和九年七月、淳和上皇崩ス、
人アリ變ヲ上テ曰、健岑等反ヲ謀リ、太子ヲ奉シ
東國ニ奔ラムトスト、藤原良房之ヲ奏シ、兵ヲ遣
ハシ健岑等ヲ捕ヘ、鞠問ス、逸勢抗言伏セス、皆流ニ
處セラル、恒貞憂苦切ニ位ヲ避シ、ヲ請フ、帝尚
ホ許サス、俄ニシテ飛書アリ、語太子ニ、關ス、帝兵
ヲ遣シ東宮ヲ圍ム、太子歎シテ曰、吾此事アルヲ
知ル久シト、遂ニ廢セラレ、道康之ニ代ル、其後藤

原基經陽成帝ヲ廢シ、恒貞ヲ迎立セシトス、恒貞
固ク拒テ受ケス、逸勢ノ伊豆ニ流サル、ヤ、其女
悲泣シテ之ニ從フ、護卒之ヲ叱ス、女乃チ晝止リ
夜行キ、以テ父ニ隨フ、逸勢途ニシテ卒ス、女墓ヲ
守テ去ラス、後詔シテ逸勢ノ罪ヲ赦ス、女乃チ柩
ヲ負テ歸葬セリ

外戚政ヲ攝ス

中臣鎌足天智帝ヲ佐テ中興ヲ成ス、始テ姓ヲ藤
原ト賜フ、子ヲ不比等ト云フ、亦大任セラル、文武
帝其女ヲ納レテ聖武帝ヲ生ム、是ヨリ平氏起ル

ニ至ルマテ、天子藤原氏ノ出ニ非ルハ、唯宇多及
ビ後三條等ノ數帝ノミ、文德帝ノ時、藤原良房ノ女
清和帝ヲ生ム、文德崩シ、清和猶幼ナリ、乃チ良房
ニ勅シテ政ヲ攝セシム、外戚ノ攝政此ニ始ル、宇
多帝始テ立ツ、基經ニ命シテ諸政ヲ關白セシム、
關白ノ號此ニ始ル、古ハ太政大臣ハ皆皇子ヲ以
テ之ヲ爲ス、其後知太政官事アリ、亦親王ヲ以テ
之ヲ爲ス、唯不比等ノ薨スル、贈ルニ太政大臣ヲ
以テセリ、文德帝天安元年、始テ良房ヲ以テ太政
大臣トス、是ニ至テ攝政關白太政大臣殆ト藤原

氏ノ世襲トナル、而シテ威福ノ柄全ク外戚ニ歸
セシハ、清和帝カ陽成ヲ基經ニ付セシニ起リ、冷
泉帝多病ニシテ政ヲ實賴ニ委セシニ成レリ、

基經陽成ヲ廢ス

陽成帝幼ニシテ位ニ卽キ、藤原基經政ヲ攝ス、帝
稍長シ、狂昏日ニ甚シ、多ク小人ヲ近ツケ、殺テ好
テ暴虐ナリ、基經數諫レ、弗聽カズ、基經大ニ憂ヒ、
遂ニ廢立ノ志アリ、公卿ヲ會シ之ヲ議ス、衆議決
セズ、藤原諸葛劍ヲ按シテ曰、今日ノ事、太政大臣
ノ處分ニ從ハザルモノハ斬ント、議乃チ決ス、元

八
卷
慶八年二月、基經帝ニ請テ陽成院ニ遷ラシメ、因
テ廢立ノ一ヲ奏ス、帝始テ驚ク、初、基經ノ大事ヲ圖
ルヤ、陰ニ宗室中ノ立ツヘキ者ヲ求メ、諸皇子ニ
詣ル、諸皇子皆脩飾シテ立ニ一ヲ求ム、獨仁明帝
ノ子時康親王容止自若タリ、是ヨリ先、基經時康
ト共ニ大饗ノ宴ニ赴ク、饋者饌ヲ送リ、時康ヲ遺
ル、時康爲ニ燭ヲ滅シテ其失ヲ掩フ、基經之ヲ見
テ、竊ニ其雅量ヲ知ル、是ニ至リ公卿ヲ率テ之ヲ
迎フ、是ヲ光孝帝トス、先帝ヲ尊テ太上皇トス、上
皇既ニ位ヲ遜レ、意ヲ遊戲ニ縱ニシ、群少ト共ニ

閭里ニ歡狎シ、無賴ノ徒因テ奸惡ヲナス、民間之
ヲ苦ム、

保則出羽ヲ定ム

出羽ノ國ハ、民夷雜居シ、土地膏腴ナルヲ以テ、姦
吏豪戶勢ニ乘シ利ヲ規ル、民大ニ苦ミ、陽成帝ノ
元慶二年遂ニ叛ス、基經計ヲ藤原保則ニ問フ、對
テ曰、怨怒ノ民ハ力ヲ以テ勝チ難シ、モシ窮ヲ救
ヒ死ヲ緩メハ、及ニ血ヌラスシテ服スベシト、乃
チ保則ニ鎮撫ヲ命ス、保則小野春風ヲ請ヒ共ニ
行ク、途頓ニ敗聞ヲ得レ、兵意氣自若タリ、既ニ出

羽ニ至リ、其未タ賊ニ從ハサル者ヲ召シ、倉ヲ發
キ、厚ク之ニ給ス、春風少キヨリ邊ニ在リ、夷語
ニ通ス、乃チ賊中ニ入リ、具サニ恩詔ヲ宣フ、夷酋
感泣シテ來降ル、是ニ於テ津輕ヨリ渡嶋ニ至ル
マテ、前代未タ内附セザル者皆服ス、保則乃チ嚴
令ヲ設ケ姦猾ヲ糺シ、務テ民產ヲ殖ス、夷民安堵
シ、邊陲無事ナリ、初メ保則才略人ニ過グレ、氏志
ヲ得ズ、是ニ至テ大ニ功アリ、而シテ基經之ヲ賞
セズ、世之ヲ非トス、

醍醐管氏ヲ貶ス

光孝帝皇子多シ、基經ヲ憚リ、未タ太子ヲ立テズ、
崩ニ臨ミ、基經立テン所ヲ請フ、帝曰、惟公ノ擇フ
所ニ任スト、基經請テ宇多帝ヲ立ツ、光孝乃チ喜
フ、宇多聰明ニシテ意ヲ政治ニ留ム、基經己ニ薨
ス、帝乃チ藤原氏ノ權ヲ分タハト欲シ、菅原道真
ノ學識世ニ絶スルヲ以テ、遽ニ拔テ右大臣ニ拜
シ、基經ノ子時平ト共ニ政ヲ執シム、帝深ク佛法
ヲ好ミ、世事ヲ厭フ、乃チ位ヲ醍醐帝ニ讓リ、且ツ
誡テ曰、道真ハ當今ノ碩學、深ク政理ニ通ス、宜ク
之ヲ敬重スベシト、後チ醍醐帝法皇ト議シ、道真

ヲ關白トナサント欲ス、道眞固辭シテ止ム、時平
自カラ門地ヲ負ミ、道眞カ寒微ヨリ出テ權己レ
ノ上ニ出ルヲ嫉ム、關白ノ内命アリシヲ聞キ、益
不平ナリ、乃チ帝ニ讒シテ曰、道眞其女壻齊世親
王ヲ立ンコトヲ圖ルト、王ハ帝ノ弟ナリ、帝大ニ怒
リ、延喜元年正月、道眞ヲ貶シテ筑紫ニ流ス、法皇
大ニ驚キ、入テ帝ヲ諭サントス、門者拒テ通セス、
道眞終ニ筑紫ニ薨ズ、道眞ノ未タ罪ヲ得ザリシ
片、三善清行書ヲ贈テ、其盈滿ヲ戒メ、退避ヲ勸ム、
而テ道眞法皇ノ殊遇ニ感レ、天下ヲ以テ自カラ

任シ、一身ノ禍福ヲ省ミルニ遑アラザルヲ以テ、
其言ニ從ハズ、終ニ禍ニ罹レリ、

延喜ノ多才

嵯峨帝以來、歷朝皆文學ヲ好ミ、又唐及ト渤海等
ト往來日ニ盛ナリ、宇多帝ノ如キハ、菅原道眞ヲ
儒門ニ拔キ、又古昔聖賢ノ像ヲ紫宸殿ニ畫カシ
ム、其心ヲ儒術ニ用ルコト此ノ如シ、故ニ當時文學
隆盛、而シテ才學ノ士朝ニ盈ツ、三善清行、博學洽
聞、法律算數ニ明ナリ、嘗テ上書シテ時政ノ得失
ヲ陳フ、世之ヲ意見封事ト謂フ、都良香、紀長谷雄

ト名一時ニ重ク、大江朝綱名海外ニ及ブ、渤海人
嘗テ邦人ニ問テ曰、大江公已ニ相トナリシヤト、
答テ曰、未シ、歎シテ曰、大邦何ソ文才ヲ重セザル
ヤト、小野道風ハ篁ノ孫ニシテ書ヲ能クシ、藤原佐
理及ヒ行成ト共ニ三蹟ト稱セラル、其他紀貫之
及ヒ友則ハ歌ヲ以テシ、島田忠臣、橘廣相、藤原菅
根ハ文ヲ以テシ、巨勢金岡ハ畫ヲ以テシ、皆名ヲ
後世ニ傳フ、後チ一條帝ノ片、人才又輩出セリ、源
經信及ヒ俊賢、藤原公任皆才能アリ、行成ト共ニ
四納言ト稱ス、藤原實資權戚ヲ畏レス、凜然朝ニ

立ち、君臣倚テ重シトス、其他大江以言及ヒ匡衡
等儒術ヲ以テ稱セラル、是時女流ニモ亦清少納
言和泉式部、赤染衛門等アリ、少納言ハ皇后ニ仕
ヘ、著ス所枕草紙アリ、紫式部ハ上東門院ニ仕ヘ、
源氏物語ヲ著シ、赤染衛門ハ榮華物語ヲ編セリ、
皆古今ノ才筆ナリ、帝嘗テ歎シテ曰、朕ノ不徳ナ
ル、惟人ヲ得タルノ一事ハ、延喜天曆ニ恥ザルノ
ミト、

將門ノ亂

朱雀帝ノ片、平將門初メ攝政、藤原忠平ニ仕ヘ、檢

非違使タランヲ求レ得ズ去テ下總ニ至リ
盜ヲナシ伯父常陸掾國香ヲ殺ス或說テ曰一國
ヲ取ルモ誅セラル數國ヲ取ルモ亦誅セラル寧
ロ關東ヲ併セ取り以テ時機ヲ待ツニ如カズト
將門之ニ從ヒ天慶二年十一月遂ニ兵ヲ舉テ反
シ都ヲ建テ百官ヲ置キ新皇ト僭號ス初メ藤原
純友京ニ在リテ將門ト善シ將門嘗テ之ニ謂テ
曰他日吾帝位ニ登ラハ子ヲ以テ關白トセムト
是ニ至リ純友モ亦兵ヲ伊豫ニ舉ケ以テ將門ニ
應ス下野ノ人藤原秀郷往テ將門ヲ見ル將門大

ニ喜ヒ倉皇出迎テ款待ス秀郷其舉止ノ輕躁
ナルヲ見爲スヲアル能ハザルヲ知テ去ル會朝
廷征討使ヲ發シ又國香ノ子貞盛ニ命シ賊ヲ圖
ラシム三年三月秀郷乃チ貞盛ト兵ヲ併セ將門
ヲ襲テ之ヲ島廣山ニ敗リ其首ヲ斬ル黨與皆誅
ニ伏ス征討使途ヨリ歸ル是ヨリ先純友間ニ乘
シテ猖獗ナリ潛カニ人ヲ遣ハシテ京ニ入り火
ヲ街衢ニ放タシム京師騷然タリ朝廷之ヲ諭シ
其歸順ヲ勸ム從ハス劫掠益甚シ讚岐介藤原國
風兵ヲ潛メテ之ヲ襲フ純友遂ニ筑紫ニ入り勢

益振フ、將門既ニ滅スルニ及ビ、官軍力ヲ併セテ之ヲ伐ツ、四年五月純友大ニ敗レテ復伊豫ニ還リ、終ニ誅ニ伏シ、禍亂始テ平ク、

安和ノ獄

初メ文德帝明察ニシテ、務テ政令ヲ修シ、清和帝寛仁ニシテ學ヲ好ミ、紫宸殿ノ朝政ヲ復シ、常平倉ヲ設ケ、新錢ヲ鑄ル等、善政相繼ケリ、兩朝心ヲ用ル此ノ如ク、而シテ大ニ爲スヲアル能ハザルハ、外戚ノ勢既ニ盛ナルト、天子佛教ニ惑溺スルトニ由レリ、光孝帝恭謙ニシテ在位亦長カラス、

宇多帝大ニ矯正ニ意アルヲ以テ、佛ノ爲大誤ラレテ、其志ヲ果サズ、醍醐帝延喜ノ治、村上帝天曆ノ政、前後比ナシト雖、外戚ノ勢亦益固シ、而戚黨ノ中忠平仲平ノ如キ亦大臣ノ量アリ、未タ悖犯ノ行アラズ、冷泉帝東宮ニ在リ多病ナリ、村上帝之ヲ憂ヒ、爲平親王ヲ立テ、冷泉ノ儲貳トセント欲ス、而レテ其源氏ト婚セルヲ以テ、藤原氏ヲ憚リ未タ果サズ、崩ニ臨ミ左大臣實賴ヲ召シ、諷スルニ意ヲ以テス、實賴旨ヲ奉セス、其出圓融帝ヲ立ツ、爲平終ニ勢ヲ失ス、安和二年三月、左馬助

源滿仲前武藏介藤原善時中務少輔橘繁延等爲
平ヲ奉シ亂ヲ作サンヲ謀ル既ニシテ滿仲意
中コロ變ジ善時ト共ニ之ヲ藤原氏ニ告ク爲平
ノ妃ノ父源高明醍醐帝ノ子ニシテ才學アリ時
ニ左大臣タリ藤原氏之ヲ忌ミ滿仲等ニ命シ併
セテ高明ヲ誣奏セシム是ニ於テ勅シテ其黨ヲ
捕ヘ之ヲ流ス初嵯峨帝皇子四人ニ姓ヲ源ト賜
ヒ藤原氏ト並ビ立テ三公トス然レモ戚黨ノ
勢益強固ニシテ源氏只位ニ充ルノミ醍醐帝ノ
皇子兼明亦源姓ヲ賜ヒ圓融帝ノ朝ニ左大臣タ

リ英明博學時望アリ關白兼通之ヲ忌ミ奏シテ親王
ニ復シ中務卿トス陽ニ其位ヲ尊クシ實ハ其權ヲ奪
フナリ兼明菟裘賦ヲ作リ以テ幽憤ヲ攄フ薨スルニ
及ビ一條帝其賦ヲ得テ意之ヲ悲ミ寫テ座右ニ置ク
然レモ帝亦仁柔竟ニ其權ヲ抑ルコト能ハス

延喜天曆ノ治

宇多帝心ヲ政治ニ用井天下雍熙ノ風アリ醍醐帝英
明ヲ以テ之ニ繼キ首トシテ儉素ヲ以テ下ヲ率ユ嘗
テ時俗ノ奢侈ナルヲ患ヒ密ニ左大臣時平ニ命シ故
サヲニ美衣ヲ著シテ入朝セシメ因テ之ヲ責テ曰今

朕專ハラ奢侈ヲ禁シ、嚴ニ制限ヲ立ツ、而ルニ左大臣
百僚ノ長トシテ、反テ禁ヲ犯スハ何ソヤト、時平惶恐、徒
歩シテ邸ニ歸リ、屏居スル一月餘、是ニ由テ奢風頓ニ
改マレリ、嘗テ夜寒シ、帝親カラ御衣ヲ脱シテ曰、民間
必ズ凍餒ノ者アラシ、朕獨リ重襲スルニ忍ヒスト、群
臣ヲ見ル毎ニ、溫言和色ヲナシ、以テ諫者ヲ來タス、故
ニ當時天下大ニ治リ、後世古ノ治ヲ語レハ、必延喜ヲ
以テ稱首トス、朱雀帝ニ至リ仁弱ニシテ、朝威振ハス、
上下恬熙ニ安ンジテ、紀綱漸ク衰ヘ、盜賊宮禁ニ入ル
者アリ、前世ノ治衰ク、村止帝其後ヲ承ケ、精ヲ勵マシ

治ヲ求メ、數年ニシテ海内復タ翕然タリ、外間其
寛ヲ譏ル者アリ、帝曰、是レ朕ノ志ナリト、一日小
吏ノ老タル者ヲ召シ、密ニ問テ曰、當今延喜ノ時
ト孰レカ治レル、吏知ラスト謝ス、之ヲ強ム、乃チ
對テ曰、只主殿寮多ク、松明ヲ進メ、率分堂ニ草ヲ
生スルヲ覺フト、蓋政務繁劇ナルト、租入少ナキ
ヲ云フナリ、帝悟リ、益勵精ヲ加フ、故ニ承平天慶
衰亂ノ後ヲ承ケ、加フルニ天德ノ災ヲ以テス、而
シテ民猶能ク數惠政ヲ蒙ルヲ得タリ、又才ヲ愛
シ學ヲ勸メ、賢才登庸セラル、後世天曆ヲ以テ延

喜ト併稱ス、

兼通兼家ノ争鬭

村上帝ノ后ハ兼通ノ妹ナリ、兼通時望ナク、而弟兼家顯達兄ニ超ユ、兼通不平ナリ、乃后ニ從テ手書ヲ請フ、曰攝關ハ宜ク兄弟ノ順序ニ隨ヒ之ヲ授クヘシト、圓融帝卽位ニ及ヒ、亦兼通ノ人トナリヲ薄シテ罷ナシ、會攝政太政大臣伊尹薨ス、伊尹ハ兼通ノ長兄ナリ、兼通乃チ后ノ書ヲ出シテ帝ニ上ル、時ニ后ハ既ニ崩ス、帝母后ノ書ヲ觀テ感愴シ、其旨ニ違フニ忍ヒス、遂ニ兼通ヲ用ヒ、太

政大臣ニ至ル、是ニ由テ兼通兼家益々惡シ、兼通ノ女皇后トナル、兼家モ亦女ヲ納ル、兼通恚リ、兼家廢立ヲ圖ルト誣奏ス、帝信セスシテ止ム、兼通病劇ナルニ及ヒ、兼家喜テ曰、吾將ニ關白タラントスト、遽ニ入朝ス、兼通之ヲ聞キ以爲ラク、己レノ病ヲ訪フナラント既ニシテ入ラスシテ過ク、兼通大ニ怒リ、疾ヲ力メテ入朝シ、奏セテ曰、臣最後ノ除目ヲ行ハント、因テ頼通ヲ以テ關白トシ、兼家ヲ貶斥シ、而後ニ邸ニ歸テ薨ス、兼家後テ歌ヲ詠シテ其沈淪ヲ訴フ、帝憐テ其位ニ復シ、後遂

ニ關白トナルヲ得タリ、兼家職ヲ長子道隆ニ傳
テ薨ス、道隆亦其弟道兼ト惡シ、疾篤キニ及ヒ、夜
俄ニ入朝シ、其子伊周ヲシテ省中ノ一ヲ統ヘシ
ム、既ニシテ衆望服セス、道兼ヲシテ職ヲ襲シム、
伊周不平ナリ、數日ニシテ道兼薨ス、伊周竊ニ喜
ブ、既ニシテ道兼ノ弟道長職ヲ受ク、伊周再ヒ失
望ス、後チ罪アリ貶斥セララル、其妹一條帝ノ后ト
ナリ、敦康親王ヲ生ム、伊周以爲ク必ス東宮タラ
ムト、既ニシテ道長ノ女後一條帝ヲ生ム、流言ア
リ、伊周之ヲ詛スト、伊周遂ニ廢死ス、

華山ノ脱屣

時ニ大臣只其官職ヲ爭ヒ、心ヲ朝政ニ留メス、故
ニ紀綱紊亂、朝士官ニ入り御物ヲ盜ムニ至ル、華
山帝立テ後、首トシテ直言ヲ求メ、綱紀ヲ振張シ、
朝野肅然タリ、初メ兼家女ヲ圓融帝ニ上リ一條
帝ヲ生ミ、圓融ニ逼テ華山ノ儲貳トナセリ、是ニ
至リ藤原義懷外舅ヲ以テ政ニ參ス、兼家之ヲ疾
ミ、又帝ノ叡明ヲ憚リ、而シテ其孫一條ノ早ク立
タシムヲ欲ス、會帝愛姬ヲ喪ナヒ、哀毀迷亂セリ、
兼家ノ子道兼狡ニシテ智アリ、竊ニ父ノ意ヲ知

ル乃チ帝ノ昏迷ニ乗シ、勸メテ佛ニ歸セシム、曰、臣モ亦奉從セント、夜ニ乗シ、潛カニ宮ヲ出テ、華山寺ニ至ル、帝猶豫ス、道兼促シテ落飾セシメ、詭テ曰、臣暫ク歸テ父母ニ訣シ、然ル後ニ剃セント、遂ニ出テ復來ラス、帝始テ欺カル、ヲ知ル、義懷等之ヲ聞キ馳至リ、君臣相視テ大ニ哭シ、遂ニ並ニ髮ヲ削ル、兼家大ニ喜ヒ、一條帝ヲ立テ朝政ヲ專ニス、晚年奢侈ヲ縱ニシ、室ヲ營シテ清涼殿ニ擬スルニ至ル、道兼以爲ク、吾レ父ニ功アリ、必其職ヲ襲ント、既ニシテ兼家之ヲ道隆ニ傳フ、道兼

失望シテ父ヲ怨ミ、喪ニ居テ戚容ナシ、世之ヲ譏

ル、華山法皇常ニ元慶寺ニ居リ、一條帝ノ崩ス、

道長ノ驕泰

道長豪俠ニシテ氣ヲ負ム、父兼家嘗テ族子公任カオヲ美メ、歎シテ曰、我子ハ皆彼ノ影ヲモ蹈ム、一能ハサラント、諸子皆羞ツ、道長尚ホ幼ナリ、進テ曰、兒固ヨリ影ヲ蹈ム能ハス、然レモ恐ハ終ニ彼ノ面ヲ蹈マンノミト、是ニ至リ父兄ニ代リ政ヲ執ル、既ニシテ女ヲ一條帝ニ納レ中宮トナシ、上東門院ト稱ス、裝奩甚盛ニシテ、侍女數十人皆

一時ノ撰ナリ、皇后敦康親王ヲ生ム、帝道長ヲ憚
リ、敢テ召シ見ズ、長スルニ及ビ之ヲ立テント欲ス、
亦敢テセズ、三條帝立ツニ及ビ、道長復タ女ヲ納
ル、帝他ノ女ヲ立テ、后トス、冊拜ニ及ビ、朝臣皆
道長ヲ畏レ、敢テ朝セス、惟藤原實資、公卿數人ヲ
率井、其禮ヲ行ヘリ、道長又其孫後一條ノ早ク立
タシムヲ欲シ、帝ニ諷シ、其眼疾アルヲ以テ位ヲ
遜レシメ、而シテ帝ノ子敦明ヲ以テ後一條ノ儲
貳トス、後一條ヨリ長スルヲ十四歳、百官其宮僚
ニ拜スル者皆固辭シテ就カス、後又之ヲ廢シ、後

朱雀ヲ立テ、ハ太弟トス、是ニ於テ一家三后、帝及
ビ太弟皆外孫ナリ、威權赫奕、富厚王室ニ過ク、其
法成寺ヲ造ルヤ、諸國司庸調ヲ輸サス、反テ造寺
ノ材料ヲ運搬シ、後シテ恐ル、ニ至ル、寺成ル
ニ及ビ、其家司ヲ賞スルニ朝官ヲ以テス、藤原氏
ノ盛ナル、此時ニ極ル、

奥羽ノ亂

後冷泉帝ノ天喜四年八月、陸奥ノ酋長安部賴時
叛ス、源賴信嘗テ關東ノ士心ヲ得タルヲ以テ、朝
議其子賴義ニ命シ、往テ之ヲ討シム、賴時降ヲ乞

ノ之ヲ許ス、已ニシテ賴時ノ子貞任婚ヲ賴義ノ部下ニ求ム、許サス、貞任怒テ夜其營ヲ襲フ、是ニ於テ賴時復タ叛シ、幾バクモナク敗死ス、而レモ貞任勢尚ホ強シ、時ニ年比リニ饑ユ、賴義援ヲ隣國ニ乞ヒ、及ヒ糧ヲ求ムルニ應スル者ナク、兵數敗ル、朝廷人ヲ遣ハシ賴義ニ代ラシム、兵民皆賴義ニ服シ、新任ノ將ニ服セス、賴義因テ子義家ト議シ、出羽ノ人清原武則ヲ招致シ、共ニ擊テ賊ヲ破リ、連戰年ヲ歷テ貞任ヲ斬リ之ヲ平ク、之ヲ前九年ノ役ト云ク、既ニ京ニ還テ其將士ヲ賞セシ

一ヲ請フ、朝議久ク決セズ、賴義私物ヲ出シテ其兵ヲ勞ス、堀川帝ノ寛治元年、武則ノ孫眞衡其族武衡等ト相攻ム、義家陸奥守タリ、乃チ眞衡ヲ助ケ武衡ヲ擊テ之ヲ平ク、之ヲ後三年ノ役ト云フ、朝議亦以テ私闘トシ、其功ヲ賞セズ、是ヨリ奥羽ノ士民皆源氏ニ服シテ朝命ヲ輕ズ、義家武略世ヲ蓋フ、貞任ヲ亡ボシテ都ニ歸リ、嘗テ關白賴通ノ邸ニ詣リ、奥羽ノ戰狀ヲ談ズ、大江匡房私ニ曰、彼將才アリ、惜カナ未タ兵法ヲ知ラズト、義家之ヲ聞キ、匡房ニ從テ學ブ、出羽ノ役ニ、金澤城ヲ

攻ム、飛雁行ヲ亂ルヲ見テ曰、是レ大江公ノ教ル
所、必伏兵アラント、之ヲ探レハ果シテ然リ、

後三條ノ剛明

帝ノ母ハ三條帝ノ女ナルヲ以テ、藤原氏其立ヲ
欲セズ、賴通最モ不敬ヲ極ム、帝以テ意トナサズ、
性剛健嚴明ニシテ人ノ牽制ヲ受ケス、東宮ニ在
テ常ニ外戚ノ專擅ヲ憤ル、既ニ位ニ卽クニ及ビ、
節儉ヲ躬カラシ、貢獻ヲ停メ、首トシテ奢侈ヲ禁
シ、紀綱ヲ正ス、時ニ權貴多ク莊園ヲ占メ、地利ヲ
專ニセリ、是ニ於テ先ツ其新ニ置シ者ヲ罷メ、記

録所ヲ設ケ、大ニ改革ヲ行フ、嘗テ曰、攝關ノ畏ル
ヘキハ其外戚ナルヲ以テナリ、朕ノ如キハ則何
ニカアラムト、一條帝以來ノ弊政、是ニ至テ頓ニ
革ル、關白賴通政ニ與カルヲ得ズ、帝位ヲ避ケ院
ニ居テ政ヲ決セムト欲シ、乃チ白河帝ニ禪ル、未
タ幾ハクナラズシテ崩ズ、大江匡房曰ク教化世
ニ被リ、紀綱大ニ張ル、隆ヲ承和延喜ニ比スベシ
ト、賴通常ニ怨望ヲ懷クモ、亦歎シテ曰、帝ノ早世
ハ我邦ノ不幸ナリト、

白河鳥羽ノ院政

白河帝剛決果斷、政已レヨリ出テ、相門手ヲ歛ム、頗ル後三條ノ風アリ、然レテ愛憎意ニ任セ、奢侈度ナク、又佛法ヲ好ミ興造止マズ、遊觀甚繁ク、國用耗竭ス、乃チ官ヲ賣テ之ヲ濟フ、是ニ於テ天下爭テ官ヲ買ヒ、父子三四人共ニ一國ヲ宰スルニ至ル、既ニ位ヲ讓リ法皇ト稱ス、猶ホ院中ニ在テ政ヲ聽キ、院ノ別當及ヒ北面等ヲ置キ、院宜ヲ以テ天下ニ號令シ、天子攝關ハ手ヲ拱シテ成ヲ仰クノミ、堀河鳥羽二帝ノ間、皆法皇ノ政ナリ、堀河帝仁明、心ヲ政事ニ留ム、諸司ノ奏案、每夜必ズ覆

視シ、疑フベキ者ハ御批シテ再議セシム、然レテ院政ニ掣肘セラレ、終ニ爲ス有ルヲ能ハズ、法皇崩スルニ及ヒ、鳥羽上皇政ヲ聽ク亦一ニ法皇ニ倣フ、初メ白河帝甚々鳥羽ノ中宮藤原氏ヲ愛ス、中宮崇徳帝ヲ生ム、鳥羽以テ子トセズ、是ニ至リ鳥羽又美福門院ヲ寵シ、近衛帝ヲ生ム、乃チ以テ崇徳ノ儲貳トシ、即日位ヲ傳ヘシム、崇徳之ヲ恨ム、既ニシテ近衛崩ス、崇徳再祚ヲ冀フ、否ラスハ其子ヲ立テント、美福、近衛ノ早世ハ、崇徳ノ咒詛ニ由ルトナリ、之ヲ啣帝、關白忠通ヲ謀リ、鳥羽ニ勸

後白河帝ヲ立ツ、帝素ヨリ德望ナシ、朝野爲ニ愕然タリ

保元ノ亂

鳥羽法皇崩ズ、崇徳上皇復位ノ念益切ナリ、嘗テ密ニ左大臣賴長ニ語ルニ已レノ意ヲ以ス、賴長ハ忠通ノ弟ニシテ兄弟相惡シ、是ニ於テ崇徳ヲ奉シ以テ兄ヲ亡ホシ、已レ權ヲ專ニセント欲ス、乃チカメテ之ヲ贊ス、後白河帝保元元年七月、上皇遂ニ源爲義ヲ召シ、兵ヲ舉ントス、爲義ハ義家ノ孫ナリ、再三之ヲ辭ス、許サズ、乃チ子弟ヲ率キ上

皇ノ宮ニ詣リ、策ヲ建テ曰、薄弱ノ地ニ據リ、寡兵ヲ以テ衆敵ヲ防クハ利ニ非ズ、宜ク宇治或ハ甲賀山ニ據リ、以テ阪東ノ兵ヲ待チ、兵モシ至ラザレバ、乘輿ヲ奉シテ東國ニ奔ルベシト、爲義ノ子爲朝モ亦請フ、今夜直ニ皇宮ヲ襲ヒ、火ヲ三面ニ縱テ之ヲ一方ニ要セバ、必全勝ヲ得ント、賴長皆從ハズ、南都ノ僧兵ヲ召テ援トセントス、爲朝退テ曰、吾兄義朝彼ニ在リ、而兵機ニ敏ナリ、今夜必來ラント、關白忠通帝ヲ高松殿ニ遷シ、勅ヲ奉シ、源義朝平清盛等ヲ遣ハシ、上皇ヲ白川殿ニ攻ム、

賴長大ニ畏レ、急ニ爲朝ヲ藏人ニ補ス、爲朝晒テ
受ケズ、爲義父子カラ盡シテ官軍ヲ防ク、義朝等
乃チ火ヲ縱テ之ヲ攻ム、上皇ノ兵終ニ敗ル、上皇
出テ走ル、賴長モ亦走リ、流矢ニ中テ死ス、上皇薨
髮シテ哀ヲ乞フ、許サズ、後讃岐ニ移サル、時ニ上
皇ノ黨人潛匿シテ出テズ、藤原通憲謀テ陽ニ其
罪ヲ定メ、皆輕ク之ヲ擬ス、黨人皆死ヲ免ル、ヲ
悅ビ、出降ル者多シ、來レバ則之ヲ殺ス、義朝其功
ヲ以テ父爲義ヲ贖ハント請フ、聽カズ、平清盛又
其叔父忠正ヲ殺シ以テ之ヲ激ス、義朝已ヲ得ス

シテ爲義ヲ斬ル

爲朝琉球ヲ開ク

爲朝ハ爲義ノ第八子、驍勇ニシテ善ク射ル、幼時
ヨリ勇ヲ恃テ人ヲ凌ク、年十三、爲義之ヲ鎮西ニ
逐フ、乃チ自カラ九國總追捕使鎮西八郎ト稱ス、
州人暴掠ニ勝ヘズ、相率テ之ヲ訴フ、朝廷爲義ヲ
罪ス、爲朝之ヲ聞キ、自カラ京師ニ來リ罪ニ歸ス、
會、保元ノ變起ル、父ト共ニ上皇ニ從ヒ、官軍來討
ツニ及ビ、爲朝宮門ヲ守リ、屢官軍ヲ却ク、上皇敗
ルニ及ビ乃チ逃ル、既ニシテ捕ヘラレ死ニ當ス、

廷議其勇ヲ惜ミ、死ヲ減ジテ流ニ處ス、通憲尚ホ
其害ヲナサントヲ畏レ、臂筋ヲ拔テ之ヲ伊豆ニ
放ツ、爲朝橫暴自如、頻ニ其諸島ヲ侵掠ス、朝廷之
ヲ患フ、後數年、近國ノ武士ニ命シ之ヲ討ツ、船艦
並ビ進ム、爲朝望見テ曰、吾東西ニ橫行スルヲ十
餘年、亦足レリ、何必シモ多ク人ヲ殺サンヤト、悉ク
從兵ヲ散シ、獨リ海濱ニ出テ、射テ一船ヲ覆ヘシ
之ヲ沈ム、衆懼テ進マズ、乃チ火ヲ放チ家ヲ焚キ、
逃テ琉球ニ入ル、其子尊敦天孫氏ニ代リ、其地ニ
王タリ、舜天王卽是ナリ、

平治ノ亂

後白河上皇藤原信賴ヲ寵ス、通憲嘗テ上皇ヲ諫
メ、信賴ヲ安祿山ニ比ス、信賴之ヲ呬ム、源義朝素
ヨリ平氏ト相軋ル、而清盛姻ヲ通憲ニ通ズ、義朝
モ亦婚ヲ求ム、通憲應セス、是ニ由テ亦通憲ヲ怨
ム、藤原經宗惟方兄弟皆通憲ノ專ナルヲ嫉ム、遂
ニ共ニ之ヲ除カン、一ヲ謀ル、二條帝ノ平治元年
十二月、信賴等清盛ガ熊野ニ往キシヲ窺ヒ、通憲
ノ家ヲ圍ム、通憲出走シテ殺サル、通憲信西ト稱
ス、博學宏才ニシテ經濟ニ長ス、上皇ノ時ニ在テ

大内ヲ修シ、記録所ヲ置キ、内宴ヲ復スル等、皆其
議ニ出ツ、然ル人トナリ刻薄、保元ノ亂ニ、久ク廢
セル死刑ヲ復シ、殺戮ヲ以テ威ヲ立ツ、是ニ至テ
終ニ禍ニ及ヘリ、信賴等遂ニ宮ヲ焼キ、上皇ヲ幽
シ、又二條帝ヲ別宮ニ遷シ、信賴自カラ大臣大將
ト稱シ、義朝以下妄ニ官爵ヲ進ム、舉朝敢テ争フ
者ナシ、獨リ藤原光賴屈セズ、經宗惟方ヲ責ルニ
大義ヲ以テス、二人大ニ悟リ、竊ニ帝ヲ奉シテ平
氏ノ第二逃ル、上皇モ亦逃ル、義朝ノ子義平急ニ
兵ヲ遣ハシ、清盛ヲ安部野ニ要擊セシメテ勸ム、

信賴決セズ、清盛途ニ在テ變ヲ聞キ、大ニ驚
キ之ヲ避ケント欲ス、子重盛之ヲ止メ、急ニ京ニ
還テ賊ヲ伐タシム、清盛之ニ從ヒ、遂ニ歸テ大ニ
賊ヲ敗ル、信賴出降リ、誅ニ伏ス、義朝東國ニ走リ、
尾張ニ至リ、長田忠致ノ爲ニ殺サル、義朝ノ子賴
朝捕ヘラル、清盛ノ繼母池尼、其幼ナルヲ憫ミ、死
ヲ宥シテ伊豆ニ流ス、義朝ノ妾常磐美色アリ、清
盛之ヲ納ル、因テ其子三人ヲ赦ス、

僧徒ノ暴橫

醍醐帝ノ片、佛法已ニ隆盛ナリ、識者以爲、天下ノ

費其半ニ居ルト、民課役ヲ逃ル、者皆私ニ自カ
ラ薙髮シ、私度漸ク濫ナリ、冷泉帝ノキ、東大寺興
福寺田ヲ爭ヒ、始テ兵ヲ構フ、朝廷制セズ、是ヨリ
僧徒公然兵ヲ弄シ、復タ國法ヲ畏レズ、白河帝最
モ佛ヲ信ス、故ヲ以テ僧徒兇暴益甚シ、訴ヘアル
毎ニ、必ス奉スル所ノ神輿ヲ舁キ、相率テ闕ニ詣
ル、請フ所許サレザレバ、則神輿ヲ放棄シテ去ル、
否レハ則妄罵闌入ス、朝廷之ヲ苦ミ、勉メテ其意
ニ從ヘバ、則始テ退ク、公卿策ナク、只使ヲ遣ハシ
神ニ禱ルノミ、或ハ其國司ヲ訴フレバ、曲直ヲ問

テ、必ズ國司ヲ罪スルニ至ル、帝治ヲ爲ス嚴斷
然レハ僧徒ニ至テハ力制スル能ハズ、嘗テ歎シ
テ曰、朕ノ意ノ如クナラザル者ハ、天下惟鴨川ノ
水ト、双六ノ簞ト、山法師ノミト、安徳帝ノキ、平清
盛諸寺ノ源氏ニ應シ、又強梁制シ難キヲ憎ミ、重
衡ヲ遣ハシテ東大興福二寺ヲ燒カシム、僧徒始
テ困ム、而レハ延暦寺猶強シ、後宇多帝ノ時ニ至
リ、亦神物ヲ奉シ闕ニ逼リ、及ビ兵ヲ構テ相鬪フ
者、尚ホ絶エズ、元弘建武ノ際、朝廷猶多ク其力ニ
依ルト云、

平氏ノ盛滿

源平二氏世々兵事ニ服ス、公卿之ヲ卑ミ、共ニ齒スルヲ耻ヅ、平忠盛鳥羽帝ニ寵セラレ、始テ朝紳ニ列ス、其子ヲ清盛トス、鳥羽ノ崩ズルヤ、親カラ諸將ノ名ヲ記シ、美福ニ授ケ、緩急之ヲ召サシム、清盛與カラズ、保元ノ亂ニ、美福忠通ト謀リ、首トシテ清盛ヲ召ス、清盛遂ニ亂ヲ平ゲ、威望漸ク著ハル、平治ノ亂ニ、源氏衰亡シ、兵力一ニ平氏ニ歸ス、而シテ後白河上皇平氏ノ女ヲ嬖シ、高倉帝ヲ生ス、是ニ由テ平氏勢益盛ナリ、其後京師訛言アリ、止皇平氏ヲ圖リ、清盛之ヲ聞キ、兵ヲ聚テ上

皇大ニ驚キ、親カラ其邸ニ幸シ、清盛ヲ諭ス、清盛謁セズ、上皇漸ク其跋扈ヲ厭フ、而シテ制スル能ハズ、乃チ落髮シテ法皇ト稱ス、蓋是時清盛子ヲ喪ヒ、薙髮セシヲ以テ、法皇モ亦之ニ倣ヒ、以テ其意ヲ慰ムルナリ、高倉帝ノ治承元年六月、法皇ノ幸臣藤原成親嘗テ大將タラムヲ請フ、法皇モ亦之ヲ許ス、清盛奏シテ之ヲ子宗盛ニ授ク、是ニ至テ成親密旨ヲ承ケ、源行綱平、康賴、僧俊、寛西光等ト共ニ清盛ヲ誅センヲ謀ル、行綱中コロ悔テ之ヲ平氏

ニ告ク、清盛大ニ怒リ、其黨ヲ執ヘ、又法皇ヲ幽セ
ントス、重盛泣テ諫メ、且ツ其兵ヲ奪フ、事乃チ止
ム、成親等ヲ流ニ處ス、西光清盛ヲ罵テ死ス、重盛
寛厚仁恕、父ノ暴逆ヲ患ヒ、疾ヲ成シテ薨ス、初メ
重盛ノ子資盛攝政、基房ニ途ニ遇テ禮セズ、基房
ノ從者之ヲ呵制ス、清盛聞テ大ニ怒リ、武士ニ命
シ、基房ノ出ルヲ窺ヒ、之ヲ掠辱セシム、重盛、資盛
ヲ逐テ、基房ニ謝ス、是ニ至リ、基房法皇ニ奏シテ
曰、仁人逝ケリ、臣ノ身危シ、法皇曰、朕モ亦然リト、
後數日、基房例ニ依テ重盛ノ封戸ヲ收ム、清盛素

ヨリ法皇ヲ怨ム、命ヲ聞テ大ニ怒リ、兵ヲ引キ入
テ法皇ヲ鳥羽ニ幽シ、基房等ヲ黜ク、高倉帝清盛
ノ女ヲ納テ、安德帝ヲ生ム、帝性又至孝ナリ、是ニ
至テ法皇ノ幽閉ヲ悲ミ、且ツ清盛ノ意早ク、安德
ヲ立ルニ在ルヲ知り、意ヲ決シテ位ヲ禪ル、清盛
大ニ喜ヒ、且ツ京師叡山ニ近ク、數僧徒ノ患アル
ヲ以テ、安德帝ノ治承四年六月、終ニ都ヲ其采邑
福原ニ遷シ、又高倉上皇ヲ要シ、數詛盟スルニ平
氏ニ負カザルヲ以テセシム、是ニ於テ政事常ニ
專ハラ平氏ニ在リ、清盛亦自カラ世人ノ己レヲ

咎ムルヲ知リ、童子三百人ヲ撰ヒ、日ニ京中ヲ巡
行シ、以テ謗ル者ヲ監セシム、是時平氏ノ采邑海
内ニ半シ、子弟顯要ニ布列ス、皆富貴ニ生長シテ、
風流嫺雅ヲ主トシ、勇武ノ氣衰エリ、

源氏兵ヲ起ス

平治以後源氏愈微ナリ、源賴政常ニ之ヲ慨ク、清
盛カ法皇ヲ幽スルニ及ヒ、賴政乃チ高倉帝ノ兄
以仁王ニ説キ、潛カニ令旨ヲ關東ノ諸源ニ下シ、
兵ヲ舉テ平氏ヲ伐タシメ、又源行家ニ命シ、間行
シテ諸國ヲ徇ヘシム、謀泄ル、治承四年五月、王賴

政ト出テ園城寺ニ走リ、更ニ南都ニ赴カントス、
平氏兵ヲ發シ之ヲ追ヒ、宇治川ニ戰フ、王兵敗レ
テ走リ薨シ、賴政モ亦自殺ス、賴政和歌ヲ善シ、才
名アリ、是ニ於テ諸國ノ源氏皆起ル、源賴朝流サ
レテ伊豆ニ在リ、僧文覺嘗テ一枯髑ヲ示シテ曰、
是レ尊父ノ首級ナリト、賴朝感慟ス、文覺因テ以
仁王ノ令旨ヲ傳ヘ、勸ムルニ事ヲ舉グルヲ以テス、是
ニ至テ乃チ兵ヲ起ス、源義仲モ亦爲義ノ孫ニシテ
水曾ニ匿ル、是ニ至リ亦令旨ヲ受テ賴朝ニ應シ、
東山北陸ノ諸國ヲ略ス、行家モ亦兵ヲ美濃尾張

ニ起ス、清盛之ヲ聞キ、都ヲ平安ニ復シ、孫維盛等
ヲシテ大兵ヲ以テ賴朝ヲ伐タシム、兵潰テ歸ル、
清盛憂憤既ニシテ疾テ薨ズ、遺言シテ曰、吾死セ
ハ佛事ヲナス勿レ、唯賴朝ノ首ヲ斬テ墓前ニ供
セヨト、子宗盛代テ政ヲ執ル、諸國ノ源氏之ヲ聞
キ勢愈盛ナリ

平氏ノ亡

賴朝既ニ關東ヲ徇下シ、其勢日ニ盛ナリ、清盛孫
維盛ニ命シ之ヲ伐タシム、齋藤實盛ヲ嚮導トス、
進テ富士川ニ至ル、實盛本ト源氏ニ仕ヘ、東國ノ
事情ヲ知ル、是ニ至リ將士ヲ激勵セント欲シ、盛
ニ東兵ノ勇ヲ稱ス、將士皆怖ル、一夜鵝鴨ノ群起
スルヲ聞キ、以テ敵至ルトナシ、狼狽シテ遁歸ル、
清盛薨ズ、宗盛遙ニ陸奥ノ藤原秀衡ニ命シ、賴朝
ヲ圖リ、越後ノ城資長ニ義仲ヲ圖ラシム、皆意ノ
如クナラズ、乃復タ維盛等ニ命ジ、十萬ニ將トシ
テ、義仲ヲ伐シム、維盛等進テ越前加賀ヲ復ス、義
仲之ヲ礪並山ニ逆ヘ、火牛ノ策ヲ以テ大ニ之ヲ
破リ、五萬人ヲ殺ス、後又之ヲ篠原ニ破ル、維盛等
僅ニ身ヲ以テ免レ歸ル、義仲行家ト尾撃シテ進

ミ叡山ニ據ル、壽永二年七月、宗盛宗族ヲ舉ケ、帝
及ヒ法皇ヲ擁シ、神器ヲ奉シテ福原ニ奔リ、遂ニ
筑前ニ奔ル、法皇途ヨリ逃レ歸ル、義仲等京師ニ入
ル、法皇使ヲ遣ハシ宗盛ヲ諭シ、帝及ヒ神器ヲ奉
還セシム、從ハズ、藤原兼實奏シテ曰、京師主ナシ、
請フ別ニ主ヲ立テ、以テ民心ヲ繫カント、八月遂
ニ後鳥羽帝ヲ立テ、義仲ニ命ジ、平氏ヲ進討セシ
ム、宗盛帝ヲ奉ジテ讃岐ニ入り、源氏ノ兵ヲ水嶋
ニ破ル已ニシテ、義仲賴朝ト隙アリ、未タ平氏ヲ
伐ツニ暇アラス、平氏乃チ四國中國ヲ徇ヘ、其勢

復タ振興ス、二年正月、遂ニ復タ福原ニ還ル、二月、法
皇、範賴、義經ニ勅シ進討セシム、範賴五萬ヲ以テ
生田ニ向ヒ、義經一萬ヲ以テ一谷ニ向フ、平氏鷲越
ノ險ヲ恃ミ、備ヘス、義經兵ヲ潛テ之ヲ踰エ、直ニ
城後ニ出テ、火ヲ放テ急ニ攻ム、平氏大ニ敗レ、安
徳帝ヲ奉シ復タ屋嶋ニ奔ル、文治元年二月、二人
復タ命ヲ奉シテ進討ス、範賴先ツ往テ豊後ヲ扼
ス、義經風雨ヲ冒シ、輕兵ヲ以テ夜航シ、遂ニ進デ
行宮ヲ攻ム、平氏復タ敗レ、駕ヲ奉シテ海ニ泛フ、
是ニ於テ四國中國九州ノ兵皆叛ク、義經追テ壇

浦ニ至ル、三月、平氏終ニ敗レ、教盛知盛、教經等一族皆死シ、宗盛ノ母、安德帝ヲ奉シ海ニ投ス、平太后及ヒ宗盛父子虜セラル、義經奉シテ京ニ入リ、宗盛ヲ鎌倉ニ送リ之ヲ斬ル、宗盛庸懦父兄ニ似ズ、終ニ敗ル、是ニ於テ平氏全ク亡フ、重盛ノ孫六代尚ホ幼ナリ、捕ラレ死ニ當ス、僧文覺乞テ僧トナス、後文覺不軌ヲ圖リ、六代終ニ坐シテ殺サル、壇浦ノ戰ニ、三神器皆海ニ没ス、後神璽神鏡ヲ獲、神劔ハ終ニ没シテ見エズ、

賴朝骨肉ヲ戕害ス

一、賴朝ノ弟、賴朝ノ弟、賴朝ノ弟

一、賴朝ノ弟、賴朝ノ弟、賴朝ノ弟

源行家濃、尾ヲ保シ能ハズ、賴朝ニ從テ地ヲ求ム、與ヘズ、源義廣モ亦兵ヲ常陸ニ起シ、來テ賴朝ニ歸ス、又禮セズ、二人皆賴朝ノ叔父ナリ、共ニ恨テ義仲ニ歸ス、是ニ由リ賴朝、義仲相惡シ、義仲既ニ平氏ヲ逐ヒ、京師ニ入ル、法皇、後鳥羽帝ヲ立ルニ及ビ、義仲以仁王ノ子ヲ立テンヲ請フ、從ハズ、義仲忿怨ス、義仲人トナリ、粗野暴戾、是ニ至リ功ヲ負ミ、驕恣ナリ、日ニ衆ヲ縱テ京師ヲ掠略シ、公卿宮人多ク凌辱セラル、法皇之ヲ厭ヒ、密ニ賴朝ヲ召ス、義仲大ニ驚キ、使ヲ平氏ニ遣ハシ、連和セ

シテ求ム、可カス、義仲遂ニ宮ヲ圍ミ、逼テ賴朝
ヲ伐ツノ命ヲ請フ、法皇己ムヲ得ズ、假リニ以
テ大將軍トス、義仲乃チ喜ブ、既ニシテ賴朝、範賴
義經ヲシテ京師ニ入ラシム、壽永三年正月、義仲
之ヲ粟津ニ拒ギ、大ニ敗ル、其臣、北國ニ歸リ、再舉
ヲ圖ラン、一ヲ勸ム、義仲曰、源氏骨肉相殘シ、世ノ
笑フ所トナル、吾復タ笑ヲ取ルニ忍ヒズト、終ニ
戰テ死ス、義仲既ニ亡フ、義經代テ京師ヲ鎮シ、務
テ寬裕ヲ示シテ、義仲ノ驕暴ニ反ス、京師大ニ悅
ビ、法皇亦之ヲ倚ル、平氏平クニ及ビ、寵遇益、厚

シ、義經ハ義朝ノ庶子、母ノ故ヲ以テ死ヲ免ル、寺
ニ養ハル、幼ニシテ大志アリ、僧トナルヲ肯セズ、
逃レテ陸奥ノ秀衡ニ依ル、秀衡善ク之ヲ待ス、賴
朝平軍ヲ富士川ニ拒クニ當リ、義經往テ會ス、賴
朝大ニ喜フ、既ニシテ義仲ヲ殺シ、平氏ヲ滅ス、皆
其力ナリ、義經趨捷ニシテ多智、賴朝之ヲ忌ム、平
氏ヲ討ツノ役、義經多ク賴朝ノ令ヲ守ラス、又鎌
倉ノ士梶原景時ト惡シ、景時之ヲ賴朝ニ讒ス、兄
弟遂ニ隙アリ、其平氏ヲハメ歸ルヤ、鎌倉ニ入ル
ヲ許サズ、又陰ニ人ヲシテ來テ義經ヲ襲ハシム、

義經之ヲ覺リ、法皇ニ請テ賴朝ヲ討タントス、藤
原兼實諫テ曰、兵出ツルニ辭ナレ、先ツ賴朝ニ諭
レ和解セシメ、從ハズレテ後ニ之ヲ伐テト、法皇
從ハズ、賴朝之ヲ聞キ、將ニ自カラ來リ討セント
ス、義經出走ル、初メ行家、義仲ニ背キ、來テ義經ニ
依ル、是ニ至リ、共ニ走テ死ス、義經吉野ニ至ル、吉
野ノ僧納レズ、乃チ微服レテ逃レ、陸奥ニ往キ、復
タ秀衡ニ依ル、秀衡死ニ臨ミ、其子ニ遺言シテ厚
ク義經ヲ奉護セシム、文治四年二月、賴朝院宣ヲ
乞ヒ秀衡ノ子泰衡ニ命ジ、義經ヲ捕ヘシム、泰衡

遺命ヲ守ル能ハズ、義經ヲ伐テ之ヲ殺ス、或ハ云
フ逃レテ蝦夷ニ入ルト、範賴從順ニシテ能ク兄
ノ意ヲ承ク、賴朝モ亦疑ハズ、富士野ノ獵ニ曾我
氏ノ二孤、其仇工藤祐經ヲ斬リ、遂ニ賴朝ノ幕ヲ
犯ス、鎌倉訛傳ス、賴朝害ニ遇フト、夫人政子大ニ
驚悲ス、範賴慰メテ曰、家兄假ヒ死スルモ、範賴在
リ、憂ル勿レト、賴朝後ニ聞テ之ヲ惡ミ、遂ニ事ヲ
以テ之ヲ伊豆ノ修禪寺ニ幽シ、建久四年八月、人
ヲ遣シ之ヲ殺ス、

列朝文ヲ崇フ

我國上古文字ノ制作アリシト雖、今其傳ハレル者蓋審ナラス、而シテ武ヲ尚フノ俗義勇餘アリテ文化未タ足ラス、應神帝十六年、百濟ノ王仁來朝セシヨリ、文學始テ起リ、風化大ニ開ケリ、此時高麗我不文ナルヲ侮リ、上書中多ク不敬ノ語ヲ用ユ、太子稚郎子見テ之ヲ怒リ、其貢ヲ却ク、蓋文學ノ效ナリ、推古帝以來隋唐ニ通セシヲ以テ、文學ノ進步極テ著シ、天智帝始テ學校ヲ興シ、百濟ノ僧詠ヲ以テ大學頭トス、當時大學ノ諸博士、皆漢人及ヒ韓人ヲ用ヒ、各食封ヲ賜ヘリ、文武帝大寶

元年、始テ大學ノ制ヲ定メ、大學寮ヲ置キ、博士助教各一員、律音書算ノ博士各二員ヲ置キ、五位以上ノ子孫、若クハ八位以上ノ子ヲ以テ學士ニ充テ、又諸國ニ博士一員ヲ置キ、國ノ大小ニ由リ、學生ノ員ヲ定ム、聖武帝ノ片、大學ノ科ヲ令テ、紀傳明經明法算術ノ四業トス、仁明帝ノ片、太后橘氏其宗族ノ爲ニ學舍ヲ建テ、名ケテ學館院ト云フ、是ヨリ先ヤ藤原氏モ亦勸學院ヲ建ツ、其後在原氏ハ獎學院ヲ開キ、源氏ハ淳和院ヲ置ク、菅原氏大江氏皆學校アリ、桓武平城二帝最モ孝道ヲ重ズ、

是ニ由リ朝野孝ヲ以テ聞ユル者文德清和ノ際
ニ至ルマデ比々トシテ出ヅ然レモ此時唐國ト
交際日ニ繁ク文化ノ極遂ニ浮華ニ弊レ上下惟
文藝ヲ事トシ實行ヲ務メズ文弱ノ風亦起レリ
而シテ實學篤行菅原道真三善清行大江匡房及
醍醐帝ノ子重明兼明ノ二親王村上帝ノ子具
平親王ノ如キアリ兼明具平ヲ前後中書王ト稱
ス其一中務卿タリシヲ以テナリ後一條帝ノ頃
ヨリ文學漸ク衰へ後三條帝ニ至テ回復ニ意ア
リト雖在位長カラズ是ヨリ以降愈衰頽シ朝士
皆歌詠遊戲ニ耽リ文恬武嬉以テ保平文治ノ亂
ヲ馴致セリ嵯峨帝和歌ヲ好マザリシヲ以テ歌
道モ亦衰弊セリ醍醐帝ノキ紀貫之等ニ勅シテ
古今集ノ撰バシム是ヨリ世々其撰アリ其格調
時ニ隨ヒ高卑アリト雖亦固有ノ風流ヲ失フニ
至ラズ壽永文治ノ際戰鬪ノ中ニ在テ猶ホ吟詠
ヲ廢セザル者アリ

王朝ノ政刑

農桑ノ業ハ蓋シ皇孫降臨ノキヨリ傳ハレリ神
武帝元年勅シテ肥腴ノ地ニ穀麻ヲ種シム今ノ

阿波及ヒ上總下總等ナリ、崇神帝農ヲ勵シ治ヲ
務ム、民始テ定業アリ、乃チ調役ヲ定ム、蓋シ租稅
ノ始ナリ、成務帝始テ國郡縣邑ヲ界シ、造長稻置
ヲ置ク、當時歷朝皆農桑ヲ重シ、屯倉ヲ設ケ池溝
ヲ開ク、虚歲ナシ、雄略帝ハ后妃ニ勅シテ、躬カ
ラ桑トラシメ、皇極帝ハ械ヲ設テ水ヲ引クノ法
ヲ創メン者ニ姓ヲ賜ヘリ、其獎勵此ノ如シ、然レ
氏成務ノ制、久クシテ漸ク泯ヒ、上下兼併ノ弊起
レリ、孝德帝大化元年、造長ヲ改テ國司トシ、訟法
ヲ定メ、吏格ヲ立テ、稅法ヲ制ス、是於テ民法始

テ定ル、當時田一町ノ租、稻六束、調絹一丈、庸ハ
一戸ニ布一丈二尺、米五斗トス、而レ氏前後水旱
蝗疫アル毎ニ、醫藥ヲ給シ窮乏ヲ賑ハシ、除免ノ
政比々トシテ出ヅ、文武帝大寶元年、又前令ヲ改
メ更ニ制度ヲ正ス、其ノ國司郡司等ハ皆責任ヲ
重クシテ食祿ヲ豐カニス、故ニ吏廉平多ク、民其
業ヲ樂メリ、陽成帝ノ後、綱紀漸ク弛ム、京官俸ニ
乏キヲ以テ、皆外任ヲ望ム、而シテ朝廷モ亦民政
ヲ重ンセズ、是ニ於テ貪風大ニ行ハレ、兼併又起
ル、後三條帝ニ至リ、斷然之ヲ禁シ、姦豪畏伏ス、白

河帝威ニ任セテ慾ニ從ヒ、多ク私地ヲ占メシヨ
リ、後三條ノ制又亡ヒ、兼并公行シテ國守ノ統ヲ
ル所、十分ノ一ニ過キズ、國守モ亦任ニ赴カズ、吏
ヲ遣ハシテ代リ治メシム、之ヲ目代ト云フ、是ニ
於テ姦吏暴行シテ民情愈、通セス、終ニ建久ノ霸
治ヲ醸セリ、刑法ノ古制、今之ヲ詳ニセズ、大寶ノ
時、刑部省ヲ置キ、始テ律ヲ設ケ、笞杖徒流死ノ五
刑ヲ定メ、判事六人ヲ置キ、讞獄ヲ掌ラシム、後其
員ヲ減シ、又明法ノ士ヲ以テ之ニ任セズ、淳和帝
諸國ノ檢非違使ヲ置キ、以テ逮捕斷獄ヲ掌トラ

シ、弘仁ヨリ仁平ニ至ルマテ三百四十餘年、刑部
復タ死罪ヲ判セズ、唯檢非違使ノ武力ニ依リ、鎮
壓ヲ行フノミ、是ニ於テ紀綱紊亂、朝憲地ニ墜ツ、
保元ノ亂ニ、藤原通憲奏シテ死刑ヲ復ス、然レハ
當時政ノ大本立タズ、徒一刑ヲ峻ニシテ威ヲ
ス、遂ニ文治承久慘酷ノ端ヲ啓ケリ、

小學國史紀事本末上卷終

明治十五年五月廿九日版權免許
明治十六年七月十七日分版御届

二拾五錢

編輯人

三重縣士族

椿時中

東京府士族

前田圓

出版人

新潟縣平民

松田周平

今板人

新潟縣地後關
長岡吳服町百番地寄留

東京府京橋區
加賀町十八番地住

新潟縣下越後國
中蒲原郡西島屋野嶋
新田六十六番地寄留